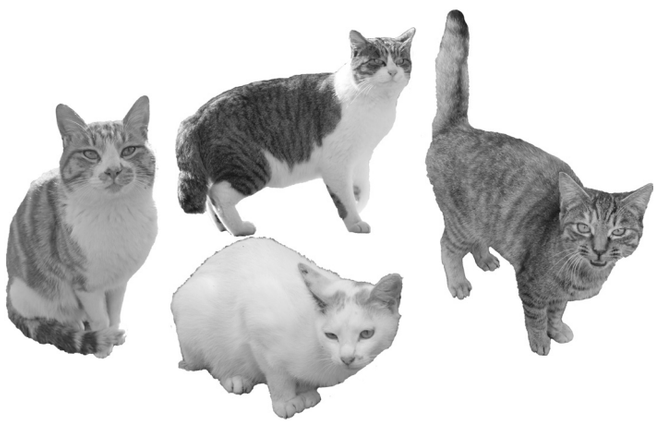
おながわ北浦民俗誌

宮城県牡鹿郡女川町北浦地区

おながわ北浦民俗誌

東京文化財研究所



おながわ北浦の猫たち　桐ヶ崎（左）指ヶ浜（上）尾浦（下）竹浦（右）

おながわ北浦民俗誌　2021年3月31日発行

編集・発行 独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 無形文化遺産部
〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43　mukei@tobunken.go.jp
印刷　有限会社太平印刷

Description of Folk Customs in Kitaura, Onagawa city

Published on March 31, 2021
Publisher
Independent Adominstrative Institution National Institutes for Cultural Heritage
Tokyo National Research Institute for Cultural Properties
13-43, Uenokoen, Taito-ku, Tokyo 110-8713 JAPAN
mukei@tobunken.go.jp

表紙写真　女川みなと祭り海上獅子舞［阿部貞撮影］

平成 23 年（2011）竹浦の春祈祷［阿部貞撮影］

4 月 29 日竹浦の祭礼で演じられる獅子振り［阿部貞撮影］

指ヶ浜　平成 20 年（2008）［国土地理院提供］
※原図の関係で集落の北側（下方向）が含まれていません

御前浜　平成 20 年（2008）［国土地理院提供］

尾浦　平成 20 年（2008）［国土地理院提供］

竹浦　平成 20 年（2008）［国土地理院提供］

桐ヶ崎　平成 20 年（2008）［国土地理院提供］

平成 27 年（2015）7 月 26 日　3 月に復興した女川駅前での獅子振り披露会

目次

口絵……1
巻頭言……6
女川 北浦地域の暮らしと祈り……8
女川・北浦の昭和史……10
北浦の人口統計……12
指ケ浜……13
御前浜……17
尾浦……21
竹浦……26
桐ヶ崎……31
さまざまな神仏……36
春を呼ぶ年中行事……38
海に生きる女性たち……49
春祈祷の獅子振り……58
参考文献……71
執筆者・協力者……72

護天山より尾浦・出島方面を望む［阿部貞撮影］

海辺の村に生きて

女川町獅子振り復興協議会会長　鈴木　成夫（しげお）

ＮＨＫの「ファミリーヒストリー」という番組を好んで見ている。出演者のほとんどは先祖のことを知らなく、番組で解き明かされて驚く。私も同じである。原戸籍の筆頭者の出生が文久三年とある。改葬した昔の墓石を見た記憶では、江戸時代中頃まではたどれそうだった。しかしご先祖様がいつどんなご縁があって、この海辺の小集落に移り住んだのかわからない。細々と営々と漁業を生業として命をつないできたのであろう。

私の父も漁業一筋だった。団塊世代の私の記憶では家業は定置網、牡蠣、ワカメ、海苔の養殖、釣り船などをその時々でやっていた。当時の養殖業は家族労働で一年中、家族全員で何か作業をやっていた。それには土、日も夏休みも冬休みもなかった。私も子供の頃から手伝いをさせられた。私は親が船員の子たちがうらやましかった。彼らは家業の手伝いがなくて休みは自由だったからである。

漁家に生まれたら漁業を継ぐのは当時の私の周辺では一般的。しかし私の親は寛大だった。将来を私の好きなようにさせてくれた。私は普通高校に進学し、東京の大学に行った。大学卒業後はすぐに就職しないで海外放浪をしたがそれも許してくれた。その後私は田舎に帰り地方自治体で働いた。地方自治にも興味があった。以来、古希を過ぎた今まで勤務先であった石巻市と住まいの女川町竹浦の中で生きてきた。

帰郷後は幾分違和感を感じた集落の空気にも、青年団や実業団活動をしていくうちに馴染んでいった。部落の正月の獅子振りや神社のお祭り、それに伴う当時盛大に開催していた演芸会などにも積極的にかかわった。そして自分の子供たちと同じ年齢の父兄と一緒に、獅子振りの笛や太鼓の継承活動をするようになった。思えばこれが竹浦の獅子振りが他とは一味違うものになったきっかけのように思う。今はこの頃の子たちが中心となって地域の子に獅子振りの練習会を開催している。

勤め先が石巻だったもので、女川の町は通り過ぎるだけのことが多かった。子供たちが長ずるにつれて部活の親の会や卒業高校の同窓会女川支部長をやったりして、町の人たちとの交流幅が広がった。また公務員退職後は女川町内の会社の役員

を仰せつかった。

そんな中で東日本大震災が起きた。いつもの安穏な日々が一瞬にして断ち切られ、混沌の中に放り込まれた。我が家は跡形もなく流失し、集落も女川の町もほとんど壊滅した。社員の住まいは女川、石巻がほとんどで中には家屋や家族を失った人たちがいた。会社の顧客も地元が多く、被害にあい休業、廃業に追い込まれた。会社は厳しくなったが、その後の町の復興が進むに連れて何とか回復基調に乗った。

震災から十年。私は多くの方々の支えがあって二〇一七年五月にもとの集落の高台に新居を構え、落ち着いた生活に戻れた。今振り返ると震災直後は苦しいこと、難しいことの連続だったように思う。我が家の再建のことで頭を痛め、集落の高台移転では、その頃は行政区長をしていたので、住民の多種多様な要望と行政各部署との頻繁な連絡調整。時に関係者の考え方の違いに困り果てたこともあった。しかし震災前の半分にはなったが、三十三世帯が戻り今はそれぞれが平和な暮らしを取り戻した。

女川の町の復興についても、私は様々な話し合いに進んで参加し、「せっかく」壊滅した町を再興するのだから「いい復興」をしたいと考え自分なりの思いのたけを述べた。「女川の魂」である獅子振りも各浜、各地区で道具が流された。これは日本財団を始め多くのご支援をいただき復活できた。今年は震災以来の悲願であった女川みなと祭りで「海上獅子舞」を行う予定である。

問題はこれからである。日本を覆う少子高齢化、過疎化は当地区に顕著にあらわれている。これから十年後、二十年後、さらに五十年後はどうなっていくのだろうか。

拙宅からは霊島金華山が見え毎日遥拝をする。我が地区は大自然がいつも輝き住みやすいところだと思う。インターネットの光が使えるので、リモートワークには最適である。地域に多種多様な人たちを受け入れて、コミュニティを存続できればと思う。私の微力がいつまで続けられるか分からないが、できるうちは地域のことに関わっていきたい。

私たちの親の世代は戦争で苦労した。私たちは大震災で大変な目にあった。日本に住んでいる限り私たちは大災害に遭遇することは避けられない。自分の代で出会わなかった人はラッキー。しかし子供や孫の代には襲われるかもしれない。一番大事なのは命。「備えよ常に」である。

二〇二一年三月

女川 北浦地域の暮らしと祈り

石巻中心部から女川に向かうと、鉄道でも道路でも、右手に万石浦を望みながら進むことになる。やがて牡鹿半島の付け根を横断し、女川湾に面した女川町中心部に至る。ここから、牡鹿半島の先端に向かって南に進めば「五部浦」と呼ばれる地域へ、雄勝方面へと北に進めば「北浦」と呼ばれる地域になる。

今回の民俗誌は、この北浦エリアを対象としている。ただし出島は含んでいない。雄勝に近い北端の指ケ浜から、御前浜、尾浦、竹浦、桐ケ崎の五集落を対象とした。

この地域は、長い歴史の中で度重なる地震・津波・海嘯等の被害を受けてきた。詳細な記録が残るものとしては、昭和八年（一九三三）三月三日の三陸大津波であろう。のちに大震嘯災記念碑が町内に建てられ、北浦では尾浦（出島にも）にある。そして昭和三十五年（一九六〇）のチリ地震津波でも大きな被害が生じたが、人命が失われな

昭和27年（1952）の竹浦。この時代は山に木が少なく、集落周辺から山にかけて多くの畑が作られていた。［国土地理院提供］

かったことは不幸中の幸いであった。その後も大小の地震や津波、台風などの被害を受けつつ、平成二十三年（二〇一一）の東日本大震災を迎えることになる。

この震災の後、女川町内の大半の集落が高台に移転し、大きく様相を変えた。また人口流出により地域コミュニティも変化せざるを得ない状況にある。このような状況下において、例えば「獅子振り」のような郷土文化が、どのように継承されるのか、大きな課題といえよう。

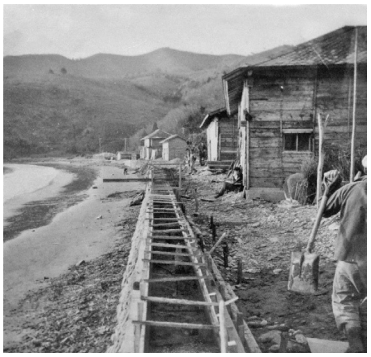
本書では、北浦地区の暮らしと祈りの伝承を、ごく一部ではあるが記録した。もとより、こうした伝承をより詳しくご存知なのは、地域に暮らす方々ご自身であろう。願わくば、これを機にこうした文化を記録し継承する試みが今後始まれば、嬉しい限りである。

※なお本書に、「安永風土記」が度々登場するが、これは江戸時代の安永年間（一七七二～八一）に仙台藩が各村の様子を調査した記録で、「風土記御用書上」とも称される。『宮城県史』等に採録されている。

「昭和24年8月25日宮城県水産業会女川出張所従業員」とある。
旧魚市場前での記念撮影。［阿部貞提供］

女川・北浦の昭和史

1926（大正15・昭和1）
町制施行により女川村から女川町となる（四月）
電話が開通（十月）
出島に電灯がつく（十月）
1928（昭和3）
尾浦尋常小学校に高等科を設置（七月）
1933（昭和8）
三陸大津波発生
町内で二六二戸が床上浸水（三月）
万石浦で垂下式カキ養殖が始まる（五月）
1939（昭和14）
国鉄石巻線が延長、女川駅ができる（十月）
1941（昭和16）
宮ヶ崎東部から石浜にかけて埋め立てと護岸工事が始まる（四月）
1944（昭和19）
竹浦、桐ヶ崎に電話が開通（四月）
1945（昭和20）
尾浦に電話が開通（八月）
1946（昭和21）
巡航船「金華丸」転覆（三月）
御前に電話が開通（四月）



御前浜の防波堤工事
昭和三十年代中頃の工事風景
［女川町教育委員会提供］

1947（昭和22）
女川小学校の一部で女川中学校開校（四月）
昭和天皇女川町行幸（八月）
1949（昭和24）
尾浦で三八戸が全焼（六月）
石巻高校女川分校（定時制）開校（九月）
1953（昭和28）
小乗浜でワカメ養殖を初の企業化（三月）
1955（昭和30）
上水道が完成する（四月）
1957（昭和32）
宮ヶ崎地区に女川魚市場が完成（三月）
1958（昭和33）
臨港鉄道が完成（三月）
1960（昭和35）
チリ地震津波。二〇六戸が全壊および流失。
被害は工場・商店・家屋の倒壊、漁船・養殖施設・定置網の流失等二十四億円（五月）
桐ヶ崎・大沢に簡易水道が完成（八月）
1963（昭和38）
着工十二年目にして県道（女川―雄勝線）開通（六月）
女川―雄勝を結ぶバスの運行開始（十一月）
1965（昭和40）
宮城バス町内線運行開始（六月）
1966（昭和41）
台風二十六号襲来。家屋全壊四戸、半壊五戸、床上浸水二六四戸、床下浸水九三九戸（九月）
1967（昭和42）
北浦・出島両地区に上水道給水開始（四月）
1968（昭和43）
十勝沖地震津波で水産関係が被害（五月）
1970（昭和45）
女川町初の交通信号機設置（八月）
1971（昭和46）
江島法印神楽が県の重要無形民俗文化財に指定（三月）
牡鹿コバルトラインが開通する（四月）
1973（昭和48）
石巻高校女川分校が宮城県女川高校に昇格（四月）
1978（昭和53）
宮城県沖地震で被害を受ける（六月）
1980（昭和55）
クリスマス台風で大被害を受ける（十二月）
1984（昭和59）
女川原発一号機が営業運転に入る（六月）
1986（昭和61）
ギンザケ養殖生産が日本一となる（七月）
1989（昭和64・平成1）
女川行政区統廃合により53区が43区に。

		出島		指浜		御前浜		尾浦		竹浦		桐ヶ崎		女川全体	
		戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口
1698	元禄11		160		69		223		—		170		68		3,313
1773	安永2	47	257	15	82	33	183	29	174	23	128	12	66		3,478
1874	明治7				68		127		171		140		27	468	3,191
1877	明治10			12		25		36		26		9			
1920	T9													1,258	7,489
1925	T14													1,454	8,760
1930	S5													1,584	9,689
1935	S10													1,708	10,573
1940	S15													1,835	11,365
1945	S20													2,513	16,398
1950	S25													2,725	16,475
1955	S30	127	839	32	203	71	401	102	642	92	576	30	199	3,082	17,552
1958	S33	119		31		70		97		86		29			
1960	S35													3,473	18,002
1965	S40													3,903	18,080
1970	S45													4,189	17,681
1975	S50	138	706	37	184	67	284	95	482	83	401	29	141	4,235	17,226
1980	S55													4,583	16,105
1985	S60													4,345	15,246
1990	H2													4,357	14,018
1995	H7													4,493	13,044
2000	H12													4,299	11,814
2005	H17	108	263	35	124	57	153	74	257	65	196	26	75	3,939	10,723
2010	H22	103	233	32	107	58	149	71	231	61	182	25	64	3,968	10,051
2011	H23	86	213	26	74	47	108	67	199	57	149	27	70	3,450	8,548
2012	H24	83	202	22	66	44	94	62	186	58	143	27	67	3,428	8,097
2013	H25	83	188	22	64	40	82	59	174	56	135	24	57	3,305	7,602
2014	H26	74	144	19	55	39	76	57	167	50	119	22	52	3,223	7,197
2015	H27	70	132	20	58	38	74	53	157	43	100	20	48	3,171	6,930

北浦の人口統計

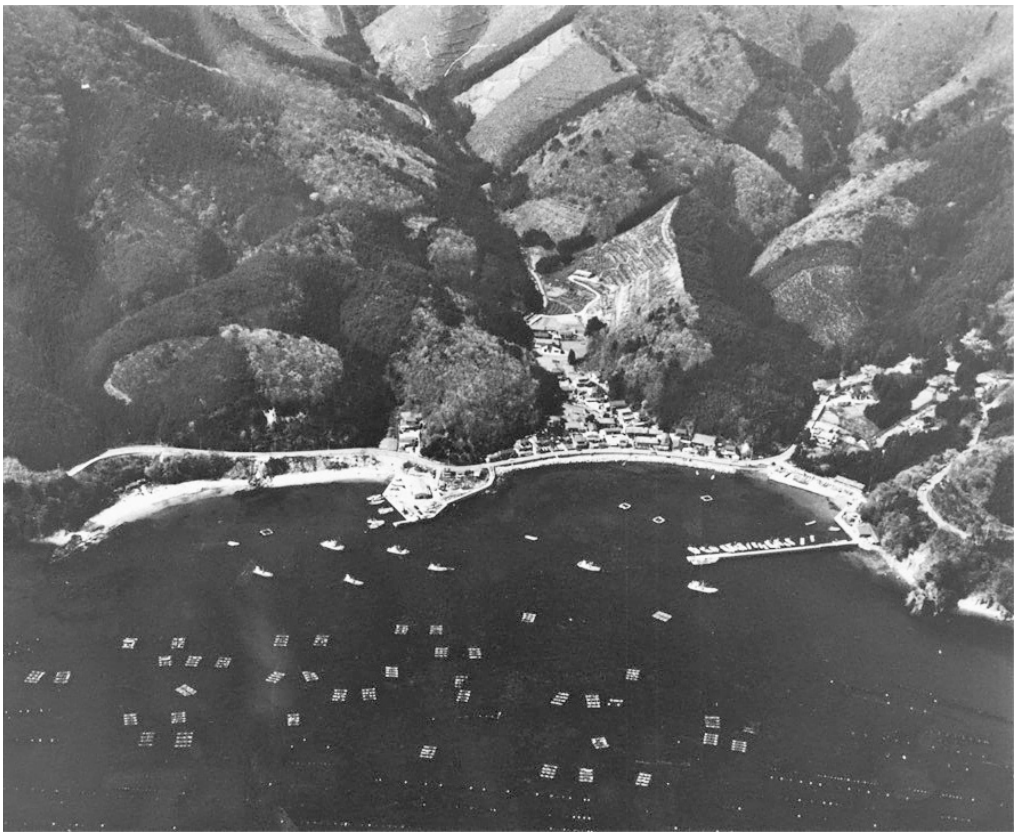
北浦地域の、近世から平成に至る人口推移を表で示した。人口規模としては、御前浜・尾浦・竹浦が同規模といえる。近世期に二〇～三〇戸であったところが昭和三十年代に七〇～一〇〇戸に膨れ上がり、その後四〇～六〇戸に推移している。

また指ヶ浜と桐ヶ崎も同規模の集落で、昭和三十年代から平成にかけて戸数は維持しつつも人口は減少の傾向にある。

いずれも人口ピークは昭和三十年（一九五五）に迎えており、尾浦・竹浦は百戸前後、人口は六〇〇人前後と、戸数も家族人数も多かったことが窺える。

これを女川全体と比べてみると、女川全体ではやや遅れて昭和四十年（一九六五）に人口ピークを迎えている。ただし戸数のピークを迎えるのは平成七年（一九九五）のことである。おそらく大家族が減ったものの、中心部の都市化によって住宅が増えた結果なのであろう。

指ヶ浜　さしのはま



指ヶ浜　昭和61年（1986）5月［女川町教育委員会提供］

指ヶ浜は内湾に流入する二本の沢に沿って細長く家並みの続く集落である。両側を急峻な尾根に挟まれているため耕地は少なく、鎮守である八雲神社はこの西側に伸びる尾根の中腹に位置する。東日本大震災後は南西部の高台に集落移転がなされた。

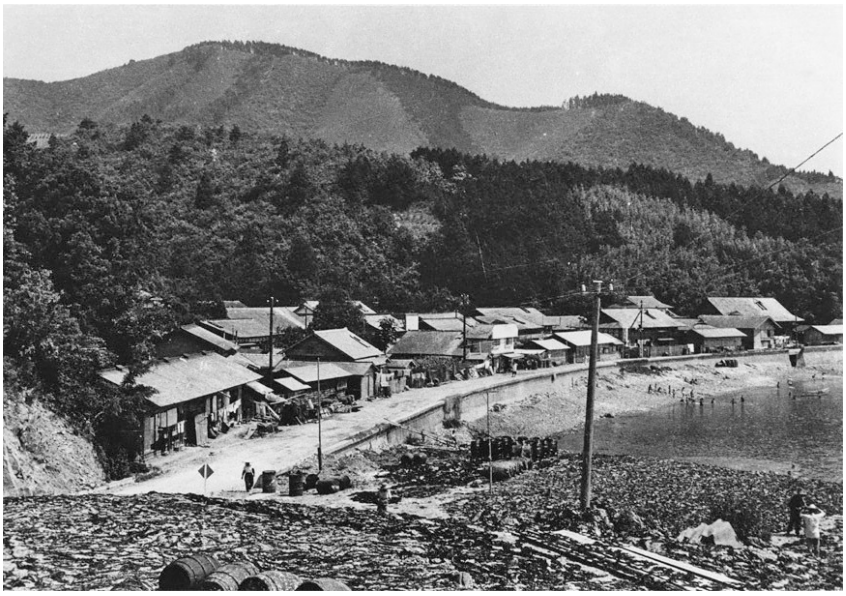
Wさん（昭和三十一年生まれ）によれば、指ヶ浜の暮らしは「仕事」としての養殖と、「魚とり」としてのコリョウ（小漁）で成り立っている。生計を維持するための稼ぎは養殖に負うところが大きいが、「魅力がある」のはコリョウ、特に春のイケスクイが漁師としての腕の見せ所であった。イケスクイはイサダやコウナゴを対象としたすくい網漁の一種で、長さ一〇メートル以上の二本の棒に取り付けた袋網を舳先から入れ、一気に救い上げる豪快な漁法である。

他の船との競争になるため、魚群によって海面の色が変わる様子をいち早く発見する「目」が重要であった。

イケスクイの網に使う棒は適度に弾力があることが重要で、かつては集落の山に生えている檜によって作られていた。しかしこの棒

は折れて怪我をする危険があり、また風や波によってあおられて飛ばされる人も出るなど、命の危険を伴う漁でもあった。しかしだからこそ養殖にはない魅力があり、漁期になると毎日のように出漁していた。

「仕事」としての養殖は様々な選択肢があり、時代や季節に応じて複数の対象を組み合わせながら営まれてきた。昭和の時代まではワカメ、ホヤ、ノリ、そしてカキが主であり、平成以降はこれらにホタテやギンザケが加わった。養殖場所は栄養分の多い順に、キシ、キシノツギ、ナカ、オキ、オキトマリの五区



昭和 30 年代中頃の指ヶ浜［女川町教育委員会提供］

演芸大会（写真上）
昭和十七年（一九四二）頃
［女川町生涯学習センター提供］

祭典記念撮影（写真下）
昭和二十八年（一九五三）六月十五日　前列右寄りの男性は獅子を抱えている［女川町生涯学習センター提供］

画に分かれており、震災後は一事業主あたり各区画二本ずつ、計一〇本の養殖筏を設置する権利が与えられている。

養殖業は天候に左右されやすく、特に嵐で海が荒れて養殖筏が海中に沈むと大きな被害を受ける。このような場合には複数の船でウィンチを使って引き上げねばならず、互いに助け合うことが必要不可欠である。漁船が損傷した時なども、浜の人々が一体となった「手伝い（金を使わずに身を削って助けること）」が暗黙の前提になっており、住民自身が集落としてまとまることに重要な意味を見出している。

こうした共同体の維持・存続には、祭りが大きな役割を果たしていることも忘れてはならない。その一つに、一月二日におこなわれる獅子振りがある。この日は実業団が主体となり、獅子が一日かけて全戸（三十数軒）を回る。指ヶ浜の獅子振りは笛がなく、太鼓のみで舞われる点が特徴である。獅子頭の動きも荒々しく、威風堂々たる感がある。翌三日が春祈祷の日であり、こちらは氏子総代と神主が主体となる。

六月十五日の八雲神社例祭、夏の女川みなと祭りなども、浜の人々が一体となって思い切り楽しむ行事であった。海で生きるためには、浜のまとまりは欠かせない。

八雲神社（指ヶ浜）

春祈祷（二〇一六年一月四日）

●信仰●

「安永風土記」には、次の大小六社が列記されている。

①牛頭天王社（天王山）
②稲荷社（天王社内）
③二渡権現社（神ノ橋）
④明神社（明神林）
⑤稲荷社（稲荷林）
⑥明神社（稲荷社内）

①～②は彌右衛門、③～④は與七郎、⑤～⑥は喜兵衛が別当を務めた。

八雲神社は海岸から集落内に入った森林のなかに鎮座している。近世には牛頭天王社という名称であった。明治四十二年（一九〇九）の「宮城県神社明細帳」では指ヶ浜一〇戸の村社となっている。

祭神は須佐之男命（すさのおのみこと）。元々の牛頭天王社が、明治期に社名と祭神名が改められたと考えられる。昭和十六年（一九四一）の「宮城県学務部社寺兵事業課調」によると祭礼日は旧六月十五日で、氏子数は二〇戸となっている。

御前浜　おんまえはま

御前浜　昭和57年（1982）11月［女川町教育委員会提供］

御前浜は内湾の奥まった場所に位置する集落である。緩やかな海岸線に沿って北側には田畑が、南側には家屋が広がっていた。東日本大震災ではほぼ全戸が被災し，南西部の高台に集団移転した。集落の三方は山に囲まれており、女川港とは護天山で隔てられているため、国道が整備されるまでは御殿峠を越えて行き来していた。

御前浜という名前の由来は奈良時代の陸奥守、百済王敬福との関連で語られる。町史によれば、王敬福の御所が営なまれたことから王前浜、すなわち御所の前の浜として伝えられ、またTさん（昭和八年生まれ）によれば、王敬福が峠（後の御殿峠）に立って麓を見渡し、指をさした浜が指ヶ浜、目の前にあった浜が御前浜になったとされる。

御前浜の生業は時代と共に変化してきたが、全体の傾向として地先漁場への依存度が低いことが特徴である。明治から昭和戦前期にかけての主要産業は、スレートであった。「明治三十八年度工業税収入見積調」によれば、御前浜の二名が「製造業スレート」を営んでおり、その内一人の年間収入見積は

二〇一〇円で、これは女川村の全工業者（九業種五十九名）中、最高額である。

大正時代には、スレートで蓄積した資本を元手に小型の巻網船を購入し、小樽まで操業しに行ったが、経営に失敗し地先の漁場を対岸の指ヶ浜に売り渡すことになったと伝わる。昭和の時代になってもスレート産業は続いた。

Tさんの幼少期には一〇軒程度の石屋があり、そのうち四軒は労働者を雇用する規模で事業がおこなわれていた。御前浜の人間が他の浜から「ヤマッコ」と呼ばれていた時代であり、「若者が村から出なくても仕事があった」時代であった。

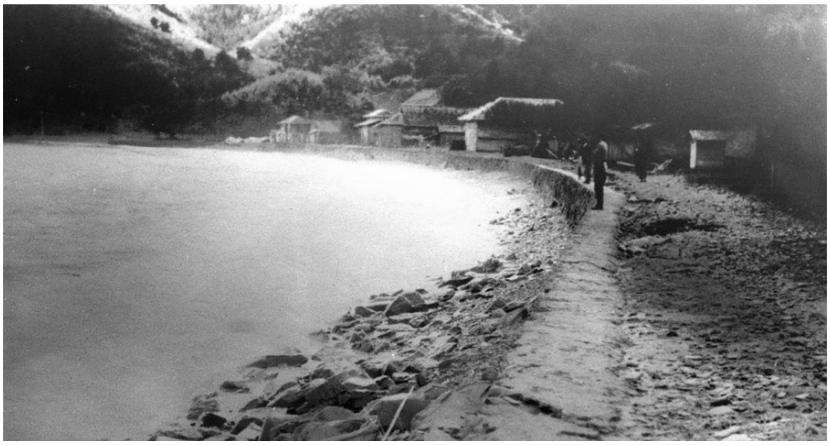
なお当時、御前浜で産出するスレートは、主に屋根瓦とビリヤード台の材料となった。これは雄勝産のスレートよりも硬く、硯の加工に向かなかったためである。

戦後になりスレートの需要が減少すると、林業、製炭業、土建業へと転換する者が増えた。Tさんの場合は、石巻市渡波の出身である母を通じて牡蠣養殖を習い、御前浜で最初に牡蠣を始めた。しかしその後も養殖業が主流になることはなく、高度経済成長期になると村を出て仕事をする者が増えていった。「御前浜には漁業がなく、田んぼが結構あった」と話されるのはこうした理由による。

御前浜のもう一つの特徴は、獅子振りがないことである。その理由としては、「かつて

獅子を降ろした時に病気が流行したため海に流した」と説明される。そのため新年一月三日の春祈祷では、鎮守の熊野神社に参拝した後、カンヌシ（神主）の家で直会をおこなうのみとなる。

旧暦三月九日におこなわれていた春の祭礼時には神輿の浜降りがあり、また同日には青年団による演劇会も開催された。獅子振りはなくとも、祭りが集落の楽しみであるのは、他の浜と変わらない。



昭和 25 年（1950）の海岸［女川町教育委員会提供］

昭和 30 年代中頃［女川町教育委員会提供］

昭和 27 年（1952）の祭典演芸会［女川町教育委員会提供］

スレートの奉納額

熊野神社昇り口

熊野神社の石盤葺材

熊野神社（御前浜）

●信仰●

「安永風土記」には、次の二社が列記されている。

①熊野社（熊野林）

②明神社（所在地記載なし）

①は市兵衛、②は久左衛門が別当を務めた。ほかに寺院として観音堂が記され、その別当を理兵衛が務めた。同年の「代數有之御百姓書出」によれば、当代で九代を数える「御前濱屋敷喜三太」の祖先は光明院と名乗る修験であったことが書かれている。もっとも光明院は二代までで、三代目興左衛門からは還俗して、以降当地で百姓となっていた。

熊野神社は集落よりも海岸に面した丘の上に鎮座している。明治四十二年（一九〇九）の「宮城県神社明細帳」では御前浜二四戸の村社となっている。祭神は伊弉冉命（いざなみのみこと）である。昭和十六年（一九四一）一月の「宮城県学務部社寺兵事業課調」によると祭礼日は旧三月九日となっている。境内には御前浜名産のスレート石に社名を刻んだ額が多数奉納されている。奉納年は明治末から昭和初期が多く、祭礼時に奉納する習わしがあったようだ。

尾浦　おうら

尾浦　昭和61年（1986）5月［女川町教育委員会提供］

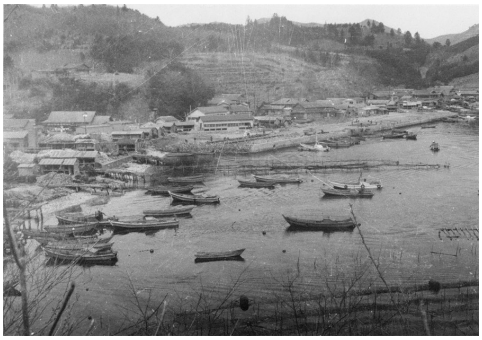
「安永風土記」によると、奈良時代に天竺の千葉大王の皇子が漂着したことから王浦、後に大浦と呼ばれるようになったという。このため、尾浦には千葉姓が多いとされている。後に皇子は雄勝半島に移ったことで、移転先が大浜（王浜）となり、大浦は尾浦になったという。大きな魚が揚がって、その尾から尾浦になったという言い伝えもある。尾浦の初漁の際には、大浜の千葉家に奉納する風習もあったという。また、出島の別当浜にも皇子もしくは千葉氏がいたとされ、その由来が長い間、入会漁業権にも結びついていた。

集落は、西側の道路から下りていくと、海岸線に沿って南北にある。字名としては南側が尾浦で、北側は鯛ノ浜。また集落内はミナミ・ナカ・アライに分かれており、ミナミは阿部・鈴木姓、ナカは千葉・鈴木姓、アライは小松姓が多い。

村の鎮守として、羽黒神社がある。古い時代には護天山に祀られていたが、それを下ろしたとされる。現在でも奥の院と書かれた石碑がある。集落には、出羽三山の羽黒山（山形県鶴岡市）にある三光院から、毎年一～二

月に拝みに来ている。特に海の仕事に携わっている家では、祈祷をしてもらっている。また集落の旅行で、羽黒山を訪れることも多い。他に同じ鶴岡市の善宝寺や、仙台市青葉区の定義山（西方寺）などにもお参りに訪れていた。

神社の管理をするのは、ナカにあるカンヌシ（神主）と呼ばれる家であった。いわゆるオオイエ（古くからある大きな家）である。祭礼を執行する際には、神職が真野（石巻市）の零羊崎（れいようさき）神社から来ており（明治以前は修験の観寿院であった）、こちらをホウイン（法印）と呼んで区別する。



昭和 43 年（1968）頃の尾浦
［女川町教育委員会提供］

昭和30年代後半の尾浦海岸［女川町教育委員会提供］

祭礼は五月五日。古くは旧暦でおこなわれていたという。祭礼の日は、神社での祭典の後に神輿を下ろし、最初にカンヌシの家で拝んでから集落を回る。先導は獅子頭、猿田彦、しお撒きと並び、氏子総代やボンデン（梵天／祭礼日の朝に作る）を持った氏子達が続く。

途中、海岸で神輿を下ろし、その場で、青年部や女性たちが踊りなどの演芸を奉納していた。かつては雄勝から法印神楽を呼んだこともあった。演芸の間に、ホウインは船に乗って出島との間の水路まで行き、金華山が見える場所で海の安全祈願をおこなう。

正月には獅子振りがある。現在は一月二日だが、かつては二日がかりで三日までおこなった。獅子頭はカンヌシの家にあり、そこから保福寺（ほふくじ）に行く。保福寺は、北浦一帯に檀家をもつ曹洞宗寺院。大般若の祈祷の後に獅子振りを舞って、それから集落を回り始めた。集落は、隔年で南北どちらから回るかが変わった。

家々を廻る際には、外にお神酒が用意されており、実業団の団長・副団長・会計は家に上がっていくので時間がかかる。新築の家では、獅子の幕の中で肩車をするトラマイ（虎舞）が演じられた。二日間かけた頃は、川を境に一日目を終了したという。集まったご祝儀は、青年部の一年間の活動資金となり、それ以外にも神社の修復や楽器などに使った。

獅子振りの獅子に相対するシシハヤシは、男性が女性の襦袢を着て踊った。正月のごぼう締めなどを持って踊っていた。また、獅子は大きな家では、幕の中に三人入ることもあった。

昭和 30 年代後半の尾浦海岸［女川町教育委員会提供］

昭和 30 年代後半の尾浦海岸［女川町教育委員会提供］

羽黒神社鳥居

羽黒神社鐘撞堂

●信仰●

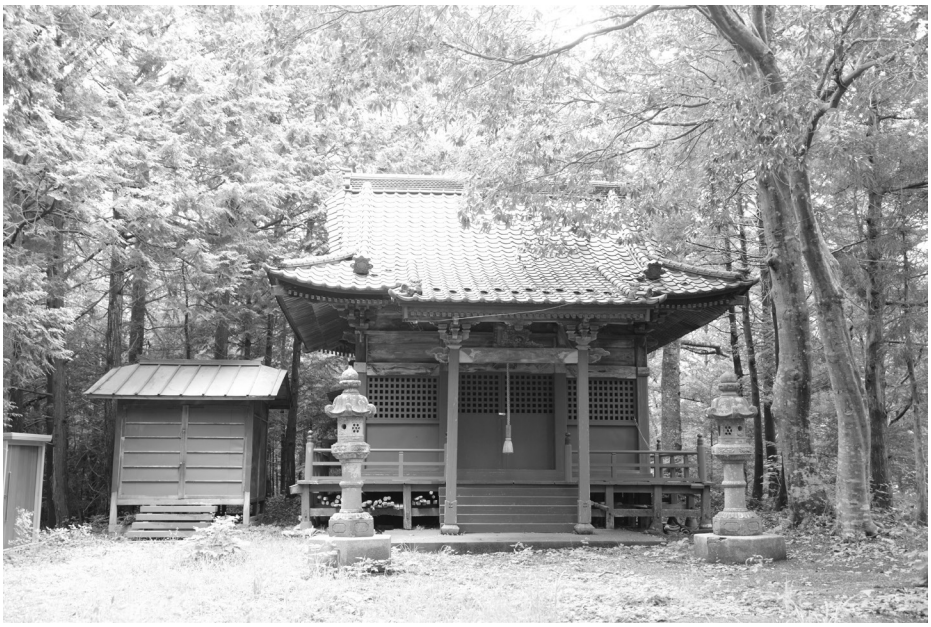
「安永風土記」では、次の八社が列記されている。

①羽黒社（護天山）
②伊勢社（伊勢山）
③稲荷社（尾浦）
④山王社（山王林）
⑤稲荷社（北野入）
⑥山神社（山神林）
⑦鱸神社（宮郷）
⑧稲荷社（尾浦）

①～②は彦四郎、③勘右衛門、④卯三郎、⑤七五郎、⑥和右衛門、⑦八十郎、⑧善六が別当を務めた。ほかに寺院として曹洞宗護天山保福寺（尾浦澤）が記されている。

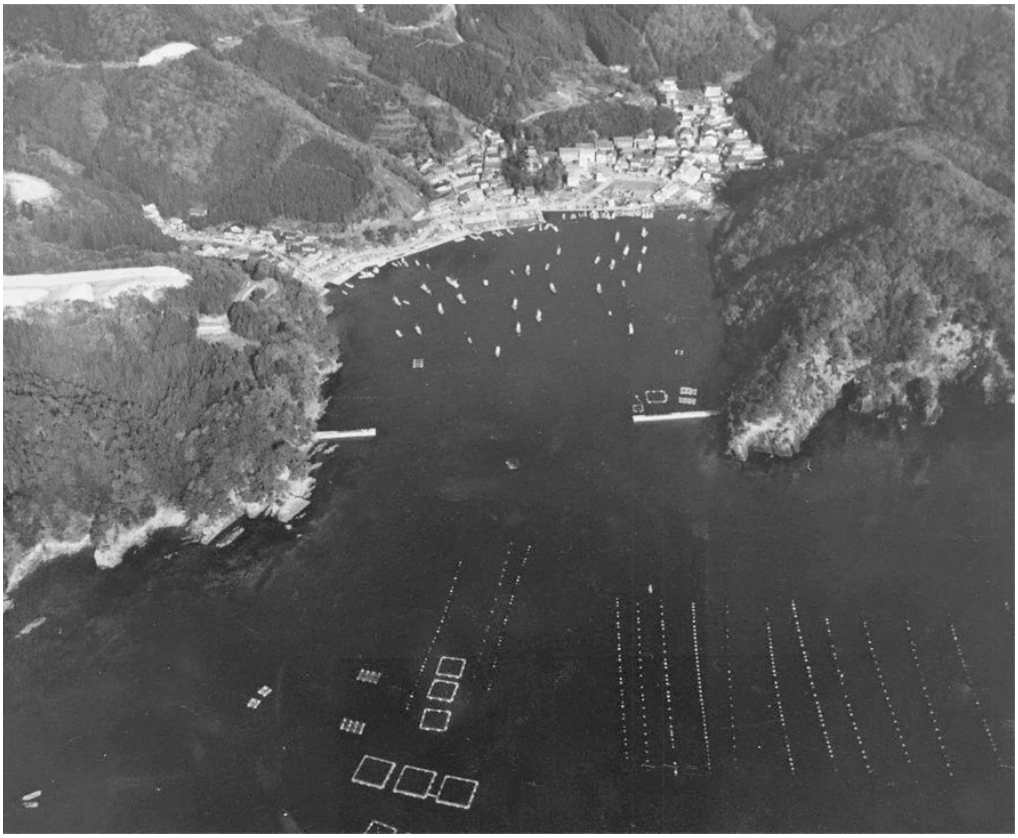
羽黒神社は尾浦のほぼ中央の山中に鎮座している。護天山の頂上付近に羽黒大権現奥院があったとされ、石浜・桐ヶ崎・竹浦・御前浜・指ヶ浜などの祭祀を担った修験者が常在していたとされる。現在そこには石碑が建てられている。

祭神は倉稲魂命（うかのみたまのみこと）で、明治四十二年（一九〇九）の「宮城県神社明細帳」では尾浦八〇戸の村社となっている。祭礼日は現在は五月だが、昭和十六年（一九四一）の「宮城県学務部社寺兵事業課調」には、旧三月七日とある。



羽黒神社（尾浦）

竹浦　たけのうら



竹浦　昭和57年（1982）11月［女川町教育委員会提供］

竹浦の地名由来は、『女川町史』では、竹の植栽によるものと推察している。近世の記録には田畑からの収入も多く記されており、半農半漁の生活をしていたことが窺える。集落は、東から「大きい浜」「小さい浜（チャッケエ浜）」「ダイワン」に分かれる。大きい浜と小さい浜との間の小山の上に庭足（にわたり）神社が鎮座している。大きい浜は阿部家、小さい浜は鈴木家がほとんどを占め、ダイワンは後から開かれた地域であるために、ベッカ（分家）が多い。屋号には次のようなものがある。

【大きい浜】マンシュウ、ハダケナガ、ウエネイ、カバフト、オイナリ、サガレン、タナガ、エンチョネ、カワムゲ、キダハシ、ニイヤ、ニシネ（西ノ家）、オモデ（タバコ屋）、カミネ（上ノ家）、ヒガシヌイ、キヅッショヤ、ハマネ、タナッコ、サガネ

【小さい浜】トンショ、チョッコラヤ、神サマ、エンチョコ（酒屋）、イモヤ、ヒラツカ、井戸端、庄屋、ヤマネ、ムゲネ、ヤマッコ、シゲヤ・ニイヤ、シタッテ

【ダイワン】タップヅ、オッシャガタ、スンヤ

竹浦の獅子振りは近年一月三日におこなわれてきたが、平成三十一年（二〇一九）から二日に変わった。発祥は不明ながら、寄磯浜（石巻市）から習ったともいわれ、また指ヶ浜や水浜（石巻市雄勝）に教えたともいう。

獅子振りに関わる記録に、「竹浦事業団関係資料」（便せん七十二枚の手書き文書）があり、昭和二十年代の記録が見られる。興味深い部分を挙げてみたい。（便宜上、句読点を施した）

まず、昭和二十七年（一九五二）の「旧正月十一日緊急役員会」記録。この頃は旧暦の一月十日に獅子振りをしていたようで獅子振り翌日の緊急役員会の記録である。協議事項が「獅子振順序検定の件」とされ、次の通り。

Y氏とS氏［原文は実名］との順序に付不服申立あり。

これは、この役員会に先立つ「昭和二十七年二月三日（旧一月八日）役員会」において、「新築家屋の順序」を決めたことを発端としている。その二日後に実施した春祈祷で諍いとなったのであろう。翌日のこの緊急役員会でその問題が約二時間にわたって協議され、結果的に従前の順番に戻したとある。ただし

昭和29年（1954）祭典［女川町教育委員会提供］

書きとして、

但し本件は団の意思を主体とし個人の意見に左右せられず、只当事者の□□（不明）を避ける事には考慮したるものなるを確信される様、了解を条件とす

とあって、あくまでも実業団の意思によることを強調している。

続いて翌年昭和二十八年（一九五三）二月の役員会では次の協議事項が挙げられている。

協議事項

一．正月十日御日祭の件

1．当番組第二組

2．七時集合し六時三十分「たいこ」を以て告知す

二．春祈祷獅子舞施行の件

1．開始時間八時半とす

2．停電実施中の為、本年度は二十四時迄とし、その前に大きい浜だけ出来る様努める事。翌日開始は七時とし、開始場所に於て「大っこ」を以て告知す

3．順序変更の件（後略）

3では、道路改新に伴い廻る家の順番を変更

平成初期の春祈祷 この頃から子どもに獅子振りを教え始めた。［阿部貞提供］

することが挙げられている。こうしたその年ごとの微細な変更は常に必要とされていた。

また興味深いのは実施時間で、この年は停電ながら二十四時まで演じている。翌二十九年には「天候に激変のなき限り夜通し行ふ事」、三十年には「行事時間を出来得る限り節減する趣旨を徹底せしむると共に、従来の中休みを行わず夜通し行ふ」とあり、熱狂ぶりが窺い知れる。

昭和三十一年（一九五六）二月二十五日の役員会では、「女川文化協会主催の獅子舞競技会参加有無の件」が協議事項とされている。

一、無形文化財の永久保持の趣旨竝に演技向上の見地依り参加する事に決定す

二、選手要員を選び直に今晩依り演技の練磨に努むる事とす

とあり、さらに出場選手の日当を多少、実業団で負担する旨や、船を一日借用する旨なども書かれている。早くからこうしたイベントがおこなわれていた例として貴重な記録といえよう。いずれの資料からも、竹浦の人々が獅子振りにかける熱い思いを感じることができる。

庭足の語源

北関東から東北地方にかけて、ニワタリまたはミワタリの呼称をもつ神社が数多く見られる。

荷渡・見渡・三渡・二渡・庭足・鶏・鶏足・仁和多利など表記は様々で、「お」をつけてオニワタリ（鬼渡）になったりネワタリに変化したものもある。

語源については不明だが、「鶏」に由来するという説や、「水渡り」が変化したという説がある。鶏とするところでは、鶏にまつわる禁忌が存在したり、ご利益として、子どもの咳や百日咳に効くということが多い。水に関係するご利益としては、灌漑や水上交通に関するものが多くみられる。

庭足神社（竹浦）

●信仰●

「安永風土記」には、次の四社が列記されている。

①神明社（槻木山）
②二渡権現社（薹ノ山）
③稲荷社（薹ノ山）
④天王社（粟彦坂）

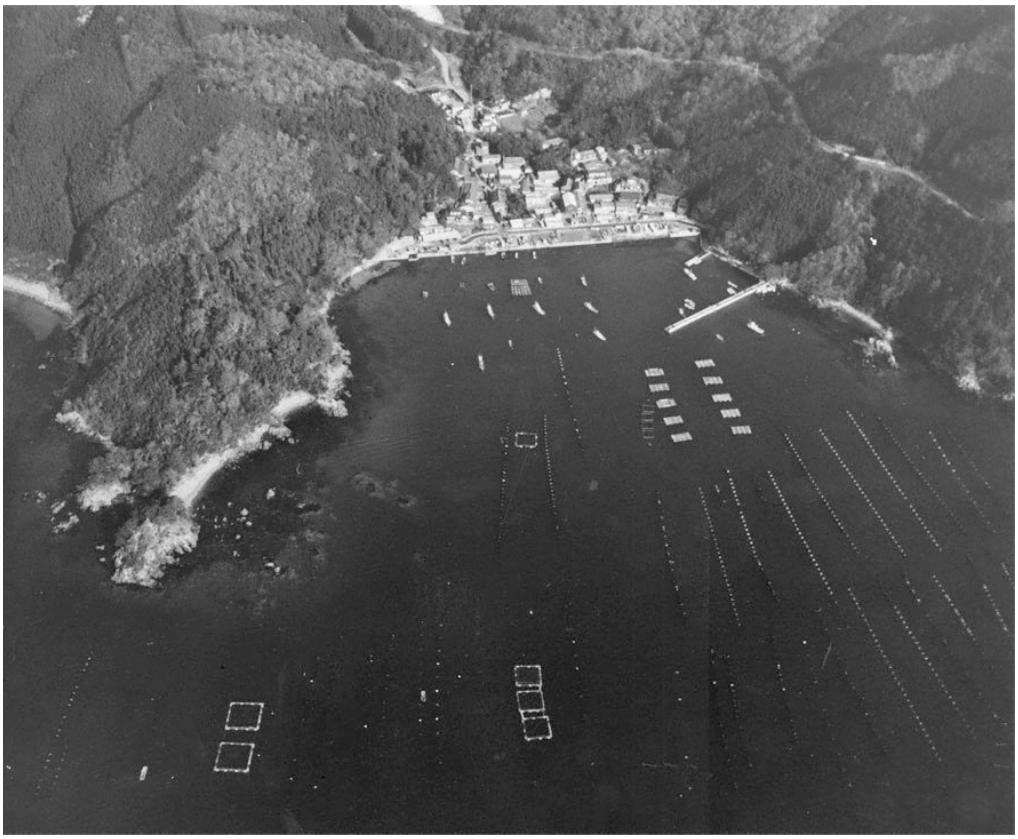
①は六助、②～③は吉郎次、④は茂左衛門が別当を務めた。ほかに寺院として太子堂（薹ノ山）が記されている。

庭足神社（庭足五十鈴神社とも）は、海が見下ろせる高台に鎮座している。近世では「二渡（にわたり）権現社」という表記であったが、明治四十二年（一九〇九）の「宮城県神社明細帳」では「庭足神社」の表記で、竹浦二三戸の村社として記されている。

祭神は、少彦名命（すくなひこなのみこと）・天照皇大神（あまてらすすめおおかみ）である。昭和十六年（一九四一）の「宮城県学務部社寺兵事業課調」によると、当時の氏子数は八〇戸で、祭礼日は旧三月五日となっている。

湾内の弁天島には琴平（ことひら）神社がある。祭神は金山彦尊（かなやまひこのみこと）、金山姫尊（かなやまひめのみこと）で、海上交通の安全を守る神として広い範囲で信仰を集めていた。

桐ケ崎　きりがさき



桐ケ崎　昭和57年（1982）11月［女川町教育委員会提供］

『女川町史』では、かつて女川湾に発生する濃霧に由来した霧ヶ崎という地名であったものが、桐の字を充てられるようになったと推測している。集落は三十戸前後で推移してきた。かつては畑も多くあり、東側にある墓地の下はすべて畑だったという。大麦や野菜など自家用の栽培であった。

住人の大半は鈴木姓。主な屋号は、次の通り。クズヤ、タナカ（田中）、ミョウジンマル（明神丸）、ウッシノエ（後の家）、ナカノエ（中の家）、シモノエ（下の家）、ムカイエ（向の家）、ウエノエ（上の家）、タバコヤ、アズマヤ、シンタク（新宅）、タケノワキ。他はこれらのベッカ（分家）が多い。春祈祷の獅子振りは、かつて並び順は関係なく、こうした旧家から廻ることになっていた。ただし最後の家に負担がかかることもあって、後に集落を四分割して廻るようにしている。

春祈祷の獅子振りは、現在は一月二日だが、古くは一月十日におこなわれていた。また年末に集落で不幸が出た場合には、正月には獅子振りをせずに、二月になってからおこなうようにしていた。

獅子振りの前日には、まず男たちが各戸を廻って米や味噌などを貰い、当日の朝からこれも男だけで調理した。船に乗る者は料理がうまかったという。できあがると、膳椀とともに持ち寄って区長宅に集まり、金比羅さんの掛け図を拝んでから、皆で食べた。

食べ終わると、午後から獅子振りを始める。一行はまずタンブチを歌い、縁側から獅子が入る。最初に神棚のあるオガミと呼ばれる部屋に入って神棚を睨みつけるように動いて向きを変えると、その家の主人のもとに向かう。このとき桐ヶ崎は「草喰い獅子」なので、前屈みで草を食べるような所作で進んだ。主人の頭を噛むと、噛んだ獅子頭を勢いよく引いてはなす。これは悪霊を呑み込むような所作かもしれないという。続いて、かつては囲炉裏の自在鉤を噛み、他の家族を噛んで回った。

このあと太鼓が緩やかになって、獅子は一旦休む。すると囃子が早くなって、天井の高い旧家ではトラメ（虎舞）が披露された。桐ヶ崎の獅子は幕が大きく四人程度が中に入るため、後方の舞手や外にいる者が支えて、獅子頭を持つ者を肩車する。

最後は尻尾から後退する形で縁側に出て、獅子から抜ける。そのまま幕で獅子頭を包んで縁側に置いた。包むのは、かつて道が細い頃にリヤカーに載せて運ぶとぶつけやすかったからだという。

その後しばらく酒食のもてなしを受けるために、一軒ずつの時間を要した。後に一軒二十分程度と決めたが、それでも長引いた。

特に旧家では遅い時間になるほど親戚一同が集まってきてご祝儀をはずむため、なかなか終えることができなかったという。

夕食はナカヤドと呼ぶ家を決めて、そこでうどんなどを出していたが、集会所ができるとそこを使うようになった。食事も仕出しの寿司などに変化している。

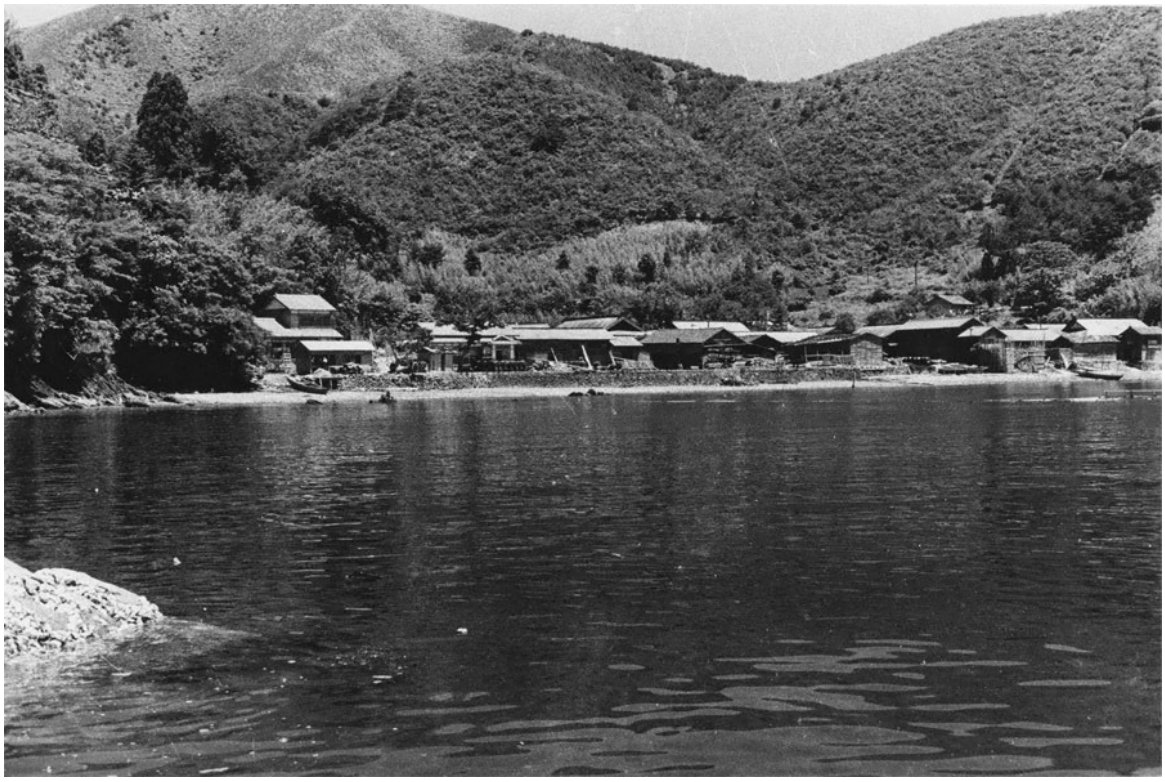
こうした獅子振りは、実業団が担っていた。桐ヶ崎の男性は、二十歳程度で青年団から実業団に入り、四十二歳まで務めた。この退団年齢は、後に若者が減ってくると上げられることになる。また青年団でも太鼓や獅子の後足などは任されることがあり、そのようにして覚えていったという。

実業団の規約で、以前は獅子振りに帰ることがうたわれていた。船で外洋に出ていたとしても、どの港以内であれば必ず帰ってくると決められており、反した者の始末書も保管されていた。

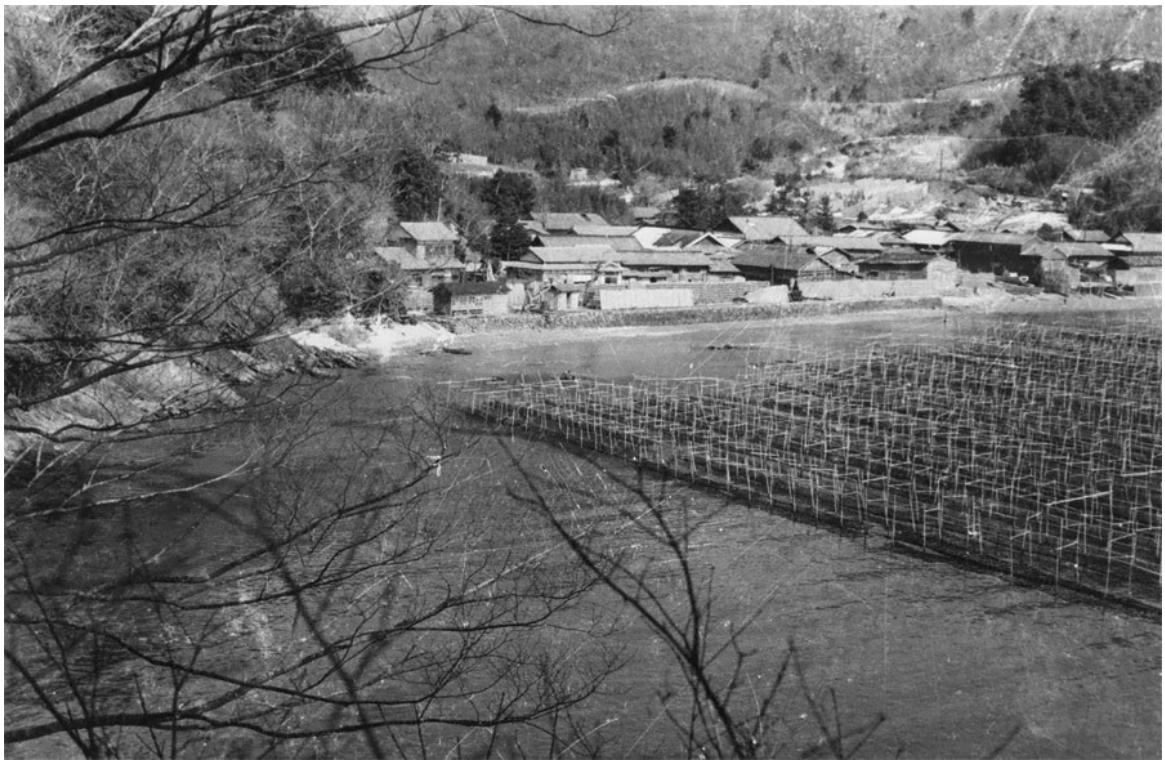
桐ヶ崎の獅子は、赤色でメスではないかという。以前、おながわ港祭りに出場を依頼された際には、獅子は神事に用いるものだからイベントに出すことはできないということになった。そこでもう一体、獅子頭をつくりそちらで港祭りに出るようにしたという経緯がある。獅子頭は震災で流失してしまったが、渡波（石巻市）の獅子頭と同型ということで製作してもらい、以前より重量の軽い獅子頭となった。

集落のもう一つの大きな行事としては、桐ヶ崎の鎮守である五十鈴（いすず）神社の祭礼がある。天照大神を祀る伊勢神宮系統の神社である。祭日は四月二十一日。かつては三月におこなっていた。桐ヶ崎には以前から神輿がなく、祭典が始まる前には、漁船が大漁旗を揚げて桐ヶ崎の海を二、三周回った。獅子はないが、太鼓も載せて叩きながら動き、六艘程度出ていたという。終わるとホウイン（法印）が来て神社で神事がおこなわれる。

なお竹浦との境界にある東北大学女川地磁気観測所の下に白髯神社の石祠が祀られており、その祭典も併せておこなった。またこのとき、住民が所有する漁船の祈祷も唱えてもらっていた。神事が終われば、集会所に集まって直会となる。このとき、獅子が出ることはなかった。



昭和 30 年代中頃の桐ヶ崎［女川町教育委員会提供］



昭和 30 年代中頃の桐ヶ崎［女川町教育委員会提供］

山神社

明治三十四年（一九〇一）と刻まれた「山神社」の石塔

●信仰●

「安永風土記」には、次の大小一〇の神社が列記されている。

①神明社（上ノ山）
②山神社（日影山）
③夷社（向山）
④二渡権現社（袖山）
⑤稲荷社（向山）
⑥明神社（上ノ山）
⑦白山社（袖山）
⑧水神社（袖山）
⑨明神社（向山）
⑩稲荷社（向山）

①～⑤は庄兵衛、⑥が卯左衛門、⑦は清七郎、⑧は長左衛門、⑨は惣左衛門、⑩は六左衛門が別当を務めた。

五十鈴神社は桐ヶ崎漁港西部のミノヤマ（上ノ山）に鎮座している。参道には氏子の家の「氏神」が奉納されている。「安永風土記」では「村鎮守　神明社」とあり、祭日は九月二十一日であった。明治四十二年（一九〇九）の「宮城県神社明細帳」では五十鈴神社の表記で、桐ヶ崎六戸の村社となっている。祭神は天照皇大神（あまてらすすめおおかみ）である。昭和十六年（一九四一）の「宮城県学務部社寺兵事業課調」によると当時の氏子数は二〇戸で、祭礼日は旧三月二十一日となっている。

五十鈴神社（桐ヶ崎）

鐘撞堂

一般的には鐘撞堂は仏教寺院にあるものだが、この地域には神社にある。修験道の名残であろうか。

真野の零羊崎神社

かつての観寿院。現在も北浦地区の春祈祷・祭礼にはここから神職が訪れる。

さまざまな神仏

法印・別当・カンヌシ（神主）

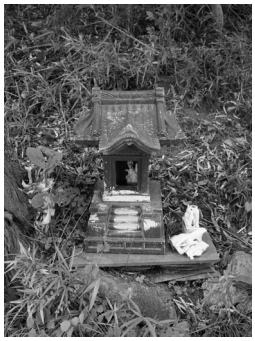
明治時代以前の信仰生活を支えたのは修験道の山伏たちで、牡鹿郡や雄勝郡では彼らは「法印（ほういん）」と呼ばれていた。村の祭祀に携わりお札を配り、時には人々の要望に応えて祈祷をおこなっていた。「安永風土記」では、桐ヶ崎・竹浦・尾浦・御前浜・指ヶ浜のすべての社寺について「祭日ニハ當郡眞野村本山派観壽院相頼幣入仕来候事」とあり、真野（現石巻市）の観寿院（現零羊崎（れいようさき）神社）が祭祀を執りおこなっていたことがわかる。

一方で、日常的な社寺の管理は「別当」が担っていた。例えば、桐ヶ崎の五十鈴神社（神明社）などの別当を務めた阿部庄兵衛は桐ヶ崎肝入の家であった。このように別当の多くは非宗教者で、必要に応じて法印を招き、祭祀を依頼していたと考えられる。

雄勝郡では各地の法印らは協力しあい神楽組を組織し、周辺の祭りで神楽を演じていた。法印神楽と呼ばれるこの神楽は、宮城県北部および岩手県南部の旧仙台藩領に分布している。尾浦では、村の行事があった際に、浜に舞台を組んで雄勝法印神楽を招いていたという。

神仏混淆の形態で人々の生活に根差していた修験道は、明治政府が定めた慶応四年（一八六八）のいわゆる神仏判然令以後、急速に解体され、明治五年（一八七二）の修験宗廃止令で決定的な衰退を辿った。こうした社会変動のなかで、法印は還俗して宗教職を離れて帰農したり、社司・社掌などの神職になっている。現在、神社の祭祀を担うのはこうした法印の流れをもつ神職家である。

春祈祷の獅子振りで重要な役割を果たすのはカンヌシ（神主）と呼ばれる家である。獅



氏神（御前浜）
石や陶器で作られた小祠が多い。

庚申（尾浦）
文字だけの石塔も多いが、これは青面金剛像タイプ。

山神（竹浦）
山の神は女神で、出産を助けるという伝承は全国で聞かれる。

子振りは、最初にカンヌシの家で獅子を起こし、最後にカンヌシの家で納めて終了する。廻り方は、通常は神社の祭典後にカンヌシの家から始められ、集落内を廻っていく。

カンヌシと呼ばれているが、彼らは神職ではない。旧家の場合が多く、カンヌシが祀っていた神社が、集落全体の神社になったとも言われる。このことから江戸時代の別当家が、明治以降にカンヌシと呼ばれるようになったと考えられるが、その理由は不明である。

ウジガミ

本分家関係に由来する親族関係をマケと呼び、各集落内でいくつかのマケが存在した。「鈴木マケ」のように姓を冠して呼ばれたり、「シゲヤマケ」のように主となる家の屋号を冠する場合もある。マケでは共通のウジガミ（氏神）を祀っている。

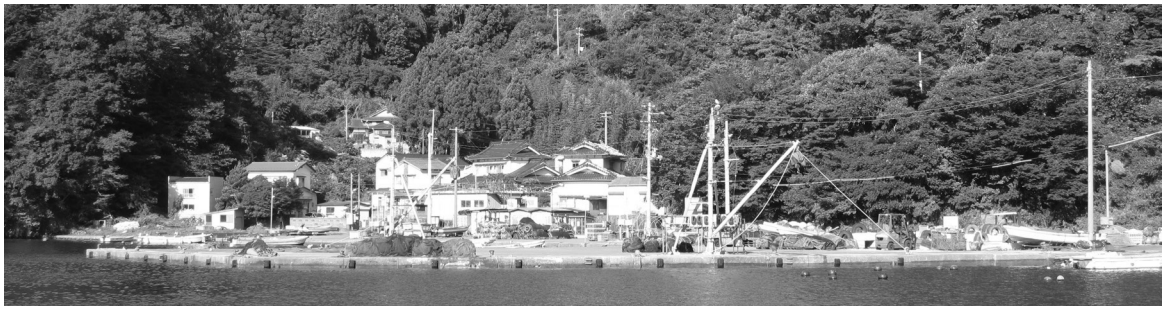
ウジガミは稲荷神や白山神、蛇神など様々である。本家が所有する山などで祀るが、村の神社内で祀る場合もある。ウジガミを祀る日は特に定まっていないが、正月には注連縄を張る。

さまざまな神さま

桐ヶ崎では庚申講が組まれ、年に一回、年配の男性が羽織袴を着て集まっていた。「マイタリ　マイタリ　ソワカ　オコシメ　コシメ」と、繰り返し唱えていたという。

桐ヶ崎の女講会では山の神を管理している。嫁に来た人がお腹大きくなってくると山の神さまが守ってくれ、特にお産のときに守ってくれる。山の神の日（三月）には羽織と着物を着てお膳を持ってお参りした。山の神の奥の茂みに地蔵があり、春と秋にお参りがあった。着物を着て一軒一軒が当番となり、当番の家に赤飯やご馳走を持って集まった。掛け軸をかけて灯明を灯して拝んだ。家でお産するときは、その掛け軸をかけたという。

竹浦では毎年一月十二日に地蔵講・山の神講があった。着物姿で小豆ご飯を持って会長の家に行った。嫁に来て仲間に入るときは、座敷で鉢をスリコギですって皆で笑ったという。「早く子供ができろ」という唱えごともあった。山の神講は、次第に小牛田（こごた）の山神社への参拝のための集まりとなった。



竹浦集落［阿部貞撮影］

春を呼ぶ年中行事

～阿部はぎ子「竹浦の年中行事」を読む～

ここでは、竹浦の年中行事として、阿部はぎ子さんの手記を紹介する。昭和二年（一九二七）生まれのはぎ子さんが東日本大震災後に残した記録で、正月から四月までの行事について詳細に記されている。また、はし書きにもあるように、姑から聞いた話も引かれており、現在は見られない事例も紹介されている。

このほか、年中行事に限らず、いわゆる民俗知識的な内容も含まれており、興味深い手記となっている。同時に、女性の視点から書かれており、台所の様子などが詳細で興味深い点もある。

そこで、本手記の解説を兼ねて手記の翻刻と共に、『女川町誌』（女川町誌編纂委員会、一九六〇年）所収の年中行事の項や、『陸前の年中行事』（東北民俗の会編、萬葉堂書店、一九七一年）、『東北地方の信仰伝承』（東北歴史博物館編、二〇〇五年）などに所収されている近在の事例を参考に補註をし、竹浦の年中行事の特徴をみていきたい。

なお、翻刻にあたり、句読点等は適宜補い、また、改段などについても読みやすいように調整している。ただし、誤字脱字などは文章の雰囲気を活かすために、できるだけそのままにしてある。理解のために必要と判断した部分については、［　］にて筆者が補うなどの加筆をしている。

すすはき

寄磯の年中行事でも十三日が煤掃きの日とされている。宮城県全体で見ると二十五日とすることが多く、この地域の特徴である。

全国的な「すす払い」は、かつて十三日におこなわれていた。

竹浦の年中行事

阿部はぎ子

はし書きとして

はし書きとして次に記した事は御諒承の上よろしくお願い致します。今私が此処に書く事柄は竹浦部落の行事習慣として部落の全ての皆様に認知された事柄では有りません。私が嫁いだ阿部家の姑（ハハ）（明治二十三年三月生）きよしおばあさんと実家の母親（山根（やまね））のつるおばあさんの日常会話の様子を夜なべの合間に又梅雨の日のお茶のみ話に聞かされた物語りの一部に過ぎません。竹浦皆様の家庭の事と必ずしも一致するものではなくその点をおわかり戴ければ幸いでございます。

ちなみに私の姑（きよし）は当時竹浦の素封家で有り事業家である鈴木喜左衛門と神官と名主のかねた庄屋から嫁がれた、つるさんとの三女だそうですので此の話しは信実のことだと信じて書き記した理でございます

三代にわたる姑達の世代は人も家も少く、二、三人の猟師と（落武者（オチムシャ））、わづかな山師の人と他の大部分は漁師で海藻を取つたり、小漁師をしたり、時には御山（金華山）のあたりに漁に行ってたそうで、気象予報も何もないので長年のかんと経験だけで小舟で櫓櫂をあやつって行ったものだと親のつらい想いを感じていたようです。そんな家族の気持も高まって竹浦住民は深く神仏を崇拝しより深い信仰を持つようになったそうです。

お正月を迎えるために

①神社の清掃のこと

十二月に入ると何日と定まったものでなく部落民の都合とお天気具合で神社の内外や参道に続（つつ）く道路などの刈りはらいや一寸した修理をしたりしますが、社（ヤシロ）の内や其の他の準備は二十日の道普請の時に行はれると思います。

②煤払き事

十二月十三日は煤払いの日としてお天気と都合次第で各家の神仏棚の清掃をする。それまで祀りかざられたおふだやまゆ玉や祈祷ふだ等を下（さ）げおろし、山から切って来た笹竹で作ったほうきで家の中の煤を払ったりする。

小豆ご飯

小豆ご飯のお膳についても、『陸前の年中行事』寄磯の事例として報告されており、特徴的である。

松迎え

『女川町誌』にある尾浦の正月行事にも、親類が松迎えに山に入ったとある。この親類は同族（マキ）を指すと思われ、大きい同族の場合は二つに分かれていたとも記述されている。『陸前の年中行事』にも同族で松迎えに行った例が、石巻市稲井、石巻市牡鹿町寄磯でも報告されており、この地域の習俗である。

なお、この部分の小さい浜は竹浦の小さい浜を指している。竹浦は大きい浜、小さい浜、台と三つの村組からなっている。小さい浜は鈴木家が中心となる。はし書きから、姑の実家の話とわかる。

常に使用していた食器、なべ、釜等もみがいたりし、清掃が終れば塩をまいて海岸で焼却処分します（棚から下しだおふだや煤払いで出た物）。

煤払いの終った夜は小豆御飯など膳に供え神仏に無事に清掃の終った事の報告する。

・笹竹を切ること

何故わざわざ笹竹を使用するか、は笹の葉の成分にバイキンを殺すきんや、清める成分が有るので漁をならべたり包んだり清める物として昔は使ったらしいです。

③女川に街出し（市）に行く

今は天文習俗行事のすべてが太陽暦で行はれていますが、昭和の初期までは田舎では太陰暦を使って暮していましたので、十二月二十日頃から三十日くらいまで各街で日を決めて正月用品を（松かざり）、年なわ、正月の膳に供える物、食料品、家庭用品、衣類の果まで買い集め船で竹浦に持ち帰りました。街出し（マチダ）（市日）の日で、朝から大にぎわいの海岸風情で、朝から元気な女達の姿が見られます。

年末と盆前には女川の町に市がたつ［阿部貞提供］

④お松様迎えの準備

これは十二月二十七、八、三十日頃に門松（カドマツ）、神棚、船等に飾る松等をあらかじめ切り揃えて山の松の根方に準備しておくために山に入って用意をしておくことです。

供え餅

供え餅を多数作るのは宮城県に広く見られる習俗である。

お手かけ松

お手かけ松は、近在の調査報告には見られない習俗である。話では旧河北町釜谷でも当たり前のようで、周辺でも見られたものだと思われる。

⑤お正月の餅搗きのこと

これが小さい浜出身のきよしさんの話し故、大きい浜の事は分かりません。二十八日餅搗きで女達は何処の家でも大へんでございました。

朝早くから少（チィ）さい浜では、親戚一同が庄屋宅に集り、松迎えに行くため赤（アカ）あか餅の準備に係るそうです。お母さん方は餅米ふかしたり、小豆をゆで上げたりし、男衆達が搗いたその時のふかしの中に、小豆を入れて搗くので、食紅でも入れたように赤くなるので赤あか餅と呼んだのだと思われます。松を迎える御祝儀の気持と、小豆を入れて健康でありたい氣持なのでしょうか。

出来上ったお餅は皆で手分けして丸め、神棚に供え、男の人達は二ヶづつ持って、するめをあぶって筒棒でたたいてそれをしゃぶりながら、前日に準備していた山に行き、松を迎えて来る。

子供達は、ふかしを食べたり、モチを食べたり、正月の餅作りに、大にぎわいの樂しい一日を暮すそうです。

又神仏に供える、又船や神社や家の各処に供えるお供え餅を作ったりします。数は各家庭によって違います。旧家では、昔来客用のお手かけ松の餅も作ったそうです。

・御手かけ松のこと

御手かけ松とは、御膳に白紙をのせ（つかい銭）、その上に（モチを乗せ）松葉をかざり、お客様が御年始に来られたら、その膳を客の前（に）出す。客は新年のあいさつと共に膳に手をかざす風習があったそうです。主に農家では、必ず行なわれたのです。私が小六年生の時、大川村の釜谷から兄嫁が来ました。その年の正月に釜谷のお客さんが来て、お手かけの膳の上に四角（シカク）にのした餅を重ねられた思い出があります。

⑥門松を建てる

十二月二十七日頃から三十日の年越しまでに、家の前（玄関の前）に門松を建てます。山に行って縁起の良い木を切って来て、二本建て、門を作る。それに松を結び、しめなわを張って祝う。正月中はお客様はその門を通り抜けて新年のあいさつに廻る。

縁起の良い木とは花咲いて実を結ぶ木

松飾り・浜砂

桃生郡の沿岸部では、門松などに海からもってきた砂利を敷く例がみられる。竹浦では松飾りと呼んでいるが、門松の記述が別にあるように、門松とは別に柱を立てる例は、『陸前の年中行事』寄磯の男柱や、『東北地方の信仰伝承』雄勝大浜のリュウジンサマなどが報告されており、これと同じものと思われる。ともに、栗などの柱を立て、松を飾り、根元に砂利を敷く。

かつおぎ・万作・栗・等。

⑦注連縄（しめなわ）作り

早い家では二十七日頃から、又男手のある家では前日から縄を筒棒で打っておきます。海水で先づ清め、やわらかく縄を揃えるために打って、二十七日になると作り方が始まります。今は街出（マチダ）しに行けば出来合のものがうっていますが、昔は手作りですので何日も手間ひまがかゝりました。

神棚のある座敷などは八丈じめと云って、一本の長いしめ縄を張り、各部屋毎（ヘヤゴト）に輪年縄を飾ったり、まゆ玉をつるしたり、お供え紙をはって餅を飾ったりします。

水神様かまど神様にもおせちなの漁や、かちぐり、干物等でせい一ぱいのお正月と神仏に住き恵みに会える事の感謝と祈りを拝みあげる氣持の現れと思います

正月のお祝いに浜で大切にしてるは船を祝うことです。今は動力船が有って活躍の場も広がり水産高も増加（ゾウカ）してきてるので、小舟は松飾りとへいそくで祝いますが、動力船の方は長い竹ざをを建て、大漁旗や船名き［旗］国き［旗］等で祝上げます。末永く航海安全に浜大漁であれと祈るだけです。

⑧年越し

年越しの日は朝から男も女も子供も大忙しの一日です。男衆は玄関洗って浜から砂利を持って玄関に盛り松飾りをする。全部終わらせて子供達は神社、山の神、氏神様や、道祖神にしめ縄を持って行って供えるなどして、女達は年越しの膳の用意し、家族の揃ったところで一年間の健康で働かせていた戴いた事えの感謝をしたり、来年の夢と希望を話し合って、除夜を迎えます。

⑨除夜（ジョヤ）の鐘（カネ）

昔護天山にも伊達郡築川（ダテゴオリヤナガワ）の職人の手によるつき鐘があったそうですが今尾浦甚句の歌詞の中に残ってるだけ姿が見えませんが…。

尾浦保福寺の鐘も戦争で召集され有りませんので、除夜の鐘の音は聞こえませんが、かねはテレビで住民は昔とこれからの世の平和と繁栄を祈って新年を迎えてます。

※以降、原文には番号がないが便宜上施した。

若水汲み

深夜〇時に若水汲みに行く例は珍しい。周辺も含めて県内では早朝とする例が多い。

⑩新年一月一日の行事

・若水を汲(くむ)

年の始めの一番の仕事として、先ず命の水を汲むことです。人間の生命を育て成長させるための第一位の水です。

大昔は若水は一家の長男が羽織、はかまの第一礼装行った。私の実家では今も行ってますが、これからモンツキもはかまもながれ、出来ません。

除夜の鐘も終り〇時の時刻(ジコク)が始まると、若水おけに輪年縄をつけ、柄杓(ヒシャク)のえに使紙(ツカイ)を巻き水引きで結び、春の新鮮な祝いの水を汲む行事です。各家々の井戸や共同井戸等で汲んで、持ち帰り神仏にあげます。元旦の膳の料理、お茶の水として使用します。

此の若水を汲むことは三ヶ日つゞきますが、私の家では若水おけは、すでに祝い、すえてある、うすの上ふたをして四日朝までおきます。四日の朝にうすを起してから、若水での支度を致します。若水汲み行事にたづさわる者は身を清め衣服(イフク)を改めて行います。

・うすを祝う

二十八日に餅を搗いたうすは、洗って乾かし、年越しの日にうすの中にお米、ます山盛にして、お金と餅二切を入れて、うすを伏せお供紙に重のもちをあげ、しめ縄を廻して祝います。

・元朝参り

元朝参りは、一家の主、又は長男が若水を汲み終え着がえして、豆がらで火をたき、神仏に灯明をあげてから、家族を起し身支度をして、竹浦の二渡り神社、五十鈴神社、金比羅宮に参拝致します。又、山の神様、氏(ウジ)神様や道祖(ドウソ)神等にも参指して帰ります。持参するものは御幣束(ゴヘイソク)、輪年縄、御賽銭、御食米(オハネ)などをささげます。

・金比羅様のこと

金比羅宮は島になってるので、海岸から拝んだり小舟で行って参拝します。保福寺の前の和尚さんの哲義和尚さんから聞いたのですが、金比羅さんは仏教の偉いお仏様でとても、きびしく、強く賢明で霊験灼(レイケンアラタカ)な方で海事のこと全て取り仕切ってる仏様なそうで、航海の無事と海なん除けの海の守り神になるそうで神として祀られております。そのため神社でなく金比羅宮としてあるのだそうです。四国(シコク)

弁天島
竹浦からよく見える二つの島。左側が神社のある弁天島。

琴平神社（弁天島）
島の頂にある琴平神社の社殿。［阿部貞撮影］

の金比羅様を分けて移籍してお祀りした時の事は、鈴木誠先区長さんが調査済みですので小さい浜のせいきさんにお聞き下さい。

弁天島の石段［阿部貞撮影］

・お正月の住民の暮し方

竹浦の住人の大部分は漁師なので、常に生き物に係って生活してるので、正月三ヶ日は精進潔斎の三ヶ日で漁や肉食を禁じて野菜を主食とし、正月の膳にもナットウやおひたし、根菜のあえ物とか汁物には油あげ等を使用して、慎み深い暮し方をいたします。余り他処には出かけず新春のあいさつも地区だけで他所の四日の臼（ウス）が起きてからにします。家族でゆっくり休養するとか、又漁師の人達も集って去年の反省とか、今年から先に向けての希望とか、仕事の工夫漁具の作方等種々。一ぱい飲みながら研究発表の場になったり、皆の意見を聞いて向上の爲の日を暮らしていきます。

⑪新年の挨拶廻りする

四日の臼が起きてから、はづした松飾りは十四日のドント祭まで保かんしておきます。四日には保福寺に御年始に参ります。御先祖様に礼拝し、御住職様、此の一年間の仏のお守りをお願いします。お寺からは立春大吉のおふだを丁戴いたし、帰宅する。新く嫁ぎ来

七草

ここにあげられている七草は、全国的に知られるものになっている。宮城県で調査をしていると、寒冷地ということ、雪国ということもあり、七草にあげられるものはもう少し地域性があることが多い。

『陸前の年中行事』では、戸倉折立で「ハコベ、芹、ノナヅナ、大根など七種類の青物」、牡鹿寄磯で「布海苔・マツボ・海苔・ヒジキ・ワカメなどの海藻をとってきて、七日の朝大根・人参を加えた七食のもの」とある。

また、『東北史地方の信仰伝承』雄勝大浜では、何も入れない白粥とある。

七草の唄

『女川町誌』には七草粥の唱え言として「唐土の鳥が因幡の里に渡らぬさきに七草たたけ、七草たたけ」とある。

たお嫁さん、おむこさんは、此の日から里帰りします。

⑫一月五日　五かん日の仕事はじめ

一月五日（ゴカンニチ）は仕事始めで、官庁を始め、会社、農家、漁家、商家の業務が始まります。農家は畑に出るとか、漁師は沖に出て漁場を見廻るとか、船の整備に係るとか動き始めます。

⑬一月七日　七草がゆ

此の朝は早起きして、用意してある七草を、まないたで細く切りたたいて、かゆの中に入れて作る、野菜入りのおかゆは、健康保ぜんの栄養調整のために行はれる行事です。

・七草のいろ〳〵

せり、なずな、ごぎょう（母子草）、はこべら（はこべ）、ほとけのざ、ほとけのざは田のふちにさく黄色の小ぎく、すゞな、すずしろ

・七草たたきの唄。長い文句ですが忘れました

七草をたたく時は、うたを唄ってた、くのです。妹やおばあさんが唄ってた、きました。

七草にたたけ七たびたゝけ唐土鳥の渡らぬうちに（くり返しうたう）

唐土の鳥とは、中国の方から来る渡鳥で、田畑をあらし廻り海の漁にも悪さをすると云ってきらわれた。カラスかもネ。

⑭一月八日

一月八日は、何時も天候不順で荒れる日続くので、霊験灼な日として昔から云はれてます。神仏に帰依して、静かで和やかな日を暮らすよう云い伝えているとの事です。

⑮一月十二日　山の神のおまつり

此の日は山師さん（山の植林伐採刈払売り買いする人）、鉱山の仕事にたづさわる人、生命に関係あることの安全と除難のために働く人達が、酒やさかなを奉げて、お祀りする日です。此の日だけでなく、毎月の十二日は安産祈願に小牛田の山の神参りをいたします。

⑯一月十四日　どんと祭

一月十四日は小正月と云って、女の正月とも云います。

どんと祭

宮城県では、全県的に一月十四日の夜に松飾りを下げ、そのまま近年ではどんと祭にてお焚き上げする例が多い。

『東北地方の信仰伝承』雄勝大浜では、昭和四十年まで一月十五日の朝に下げていたものを、生活改善運動により一月七日に変更し、この日にどんと祭を行うようになったとする。『女川町誌』には、一月十五日として「一切の松や七五三飾を取りはずして神社の境内などに送り又鳥追する部落もある。太陽暦に改めてから松送りを七日に行う家庭もある」としている。

近年は桃生郡、牡鹿郡は七日の夜にどんと祭を行う地域が多い。

はらみご

削りかけを施した作りものである。『東北地方の信仰伝承』雄勝大浜でもハラミゴとダンポをつくり、ハラミゴには削りかけ

各家では二週間飾った松かざりや、神仏棚、お供やお供餅をおろします。家の内外、しめ縄やへいそくをはづして、海岸に持って行き、部落の長老達が塩を振り清めてか、消却処分致します。

竹浦では、神棚やかまど神に飾ったまゆ玉は、十二月のすす払いまでつるします。縁起のよい物三年かざれとか、云って。

・はらみご

はらみごは十四日に山に行って、（かつの木）など、肌の白い柔い木を切って来て、五・六寸位の長さに切っておく。これは枝の太目の部合を使う小刀で、先方に向けて細くけづりあげる。パーマネント頭のようにして、一対とか二対とかにして、膳にのせておく。次にダンポを作る

・ダンポ（中国）のタンポのこと

ダンポは刀の長さに木ってけづって、刀のツバをつける。腰にさせるようにする。これもはらみごと一緒に膳にのせ、神棚の前に飾り供える。木当はダンポでなくタンポと呼びます。中国の合戦の道具で、槍（ヤリ）のことでその先に綿や布を巻き常（つね）には支をかくしておく。

今テレビ漢ドラでやって中国の兵士の持ってる、合戦の道具でさやを払って使用するふ廻したり、かりあげたり、ついたり。して素晴しい武器です日本に来てタンポがダンポになった。

・はらみご使い方

はらみごは。それでタンスや米ビツ等をたたく、ハラメハラメと云いながら、タンスや、米びつをたたき、大漁万作でお金も一ぱいはらむように願った。

⑰柳鳥（カセドリ）のこと　かせ鳥の歌はどんな文句でしょうか

十五日夜にダンポをさして、ざるやボール等入物って、各家を廻ります唄って歩きます。カセドリカンカン――この後は分かりません。

カセドリの唄をくり返し唄って廻り、お餅やもかんやいろ食べ物戴いて帰宅します。きっと柳をかけられた鳥になって、皆の家に食料調達にあるいたのかも知れません。昔のことですから。

けを施すとある。『陸前の年中行事』寄磯では小正月にカツノキ似削りかけを施した「ハラミギ（祝いましょう）」を作るとある。この地域に特徴的な小正月の作りものである。

カラスボイ

内容をみるとトリオイである。トリオイ行事は一月十五日の朝に行うことが多い。近在では、『陸前の年中行事』寄磯は十五日早朝、『東北地方の信仰伝承』雄勝大浜は十六日早朝とある。両日が混在しているようである。なお、前夜に外した正月飾りの紙垂をはずし、長い竿を付けて、ヤヘイガミ（ジャホイガミ）と呼ぶ飾り物とする。この竿をもってトリオイを行い、その後正月いっぱい庭に立てておく、とする事例が近在に限らず各地にある。文中にある竿はこれを意味しているのか不明である。

⑱一月十六日　地獄の釜のふたも開く日

仏教のおしえで、人生の中で悪事を働けば、死後、地獄に落ちて火あぶりのけい、熱湯かぶり。せめせっかんの体罰を受けるとされているが、十六日の一日だけは、御仏の慈悲の力で、罪一等をげんぜられ、地獄の釜のふたも開きます。

そのために此の日、御仏の力と心に感謝して、お寺参りや、御先祖の墓参りしたりするのが、十六日の大切な行事です

・一月十六日のカラス追い

竹浦ではカラスボイと云ってますが、何処の地方でも鳥追いの儀式として行ってるようです。農村では田畑を荒らす渡り鳥。浜の方では、海岸に来て、ほし魚や漁に関係のある海鳥などをとる、カラスのような鳥追の行事ですが、家の前、建てかけた長い木や竹竿を、木や棒でたゝいて音を出す。それに合せって、ヤーホーと大声でさわぐので、カラスはびっくりして大空高くまいにげ帰る。

寒い北風の中、大声でヤーホーと追われ、鳥達は大空にまい、あっち、こっち、にげ廻る、冬の朝の一つの風物詩です。

⑲一月十八日夜

何故か浜方には仏教行事が多いようです。常日頃生きもの取って生活してるので、漁民としてせめてもの償いと感謝の気持の現れでしよか。此の事は、各家庭によっても違いますが、月を拝むことに変り有りません。

十八夜の月が出たら、膳に盛り塩と水と笹餅をあげ、灯明をつけて家の主、家族がおがみます。笹餅は笹葉三枚を皿にならべ、一枚に四切づつにちぎった餅をならべる。家の神棚仏様、かまど神にも小豆の餅をあげて拝みます。

⑳二月一日（小正月の頃）草餅つき

二月一日小正月とも云って、女達のお正月でもあったようです。昔の譬話に二月の空と、獅子頭は荒れる程よい等と云はれ、此の季節は天候不順の日が多かったので、女達のゆっくりする時だったと思います。前年に採取していたよもぎなどで草餅をついたり、大豆やゴマなどを入れて餅を作り、丸めてざるに重ね入れ、保存して春の磯の開口の時のたばことして持参したものです。

二月一日

二月一日に餅をつき、休み日とする例は県内に広くみられる。この前夜をツタのトシコシなどと呼ぶ例が県北部に、次郎のトシコシとする例が県南部にみられる。『陸前の年中行事』寄磯、『東北地方の信仰伝承』雄勝大浜では、この日をコショウガツ（小正月）としている。『女川町誌』に全町的に小正月と呼ぶとあり、この地域の民俗語彙である。

㉑二月十日（御日祭（オヒマツ））金比羅様

二月十日は金比羅宮の御日祭（オヒマツ）り（御縁日）で、神主の家で守り本尊のお姿や掛軸など掛け、オボキ（あずき御飯）をたいて、御神酒（オミキ）、塩や灯明をつけて礼拝してます。各家の青荘年・漁業者は必ずお参り致します。航海安全を海難厄除けの神金比羅さん前を通る船人達は、必ず脱帽し頭を下げて通ります。

㉒二月後期　海藻の開口（くちあけ）、磯につく物何でも、ウニ、アワビ、ナマコ、タコなど、その季節毎に開口して取る

昔は二月後半になると、海凪（うみなぎ）の日にはやわかい新物を取るために、早々の開口もあったようですが、浜の暮しも仕事も年毎に多様化して来たので、寒い季（とき）には開口にならず、お彼岸すぎなる事も有ります。

戦中戦後は組で（となり組）が存在したので、班で取りました。現在は養殖の仕事で出漁する数も少なくなり個人取りました。

㉓三月三日　ひなまつり

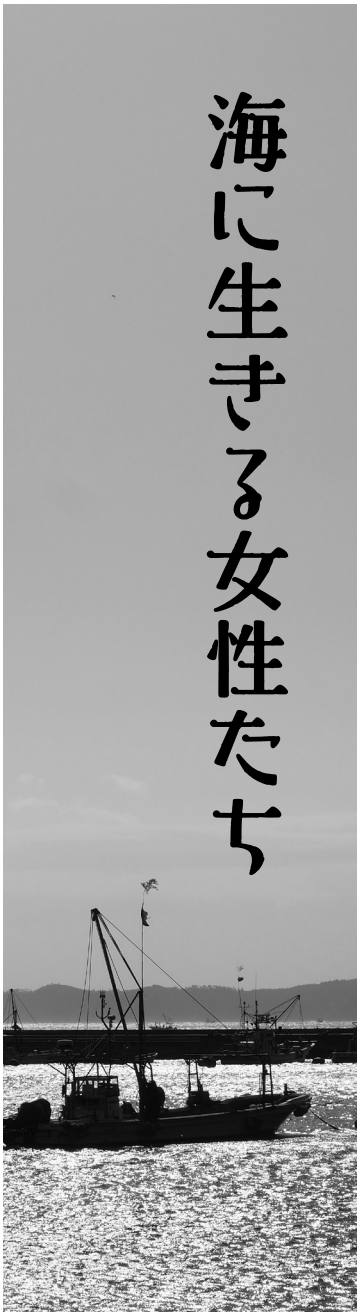
昔は地方ではひな人形は中々求められず、帆船時代に京都から来るひな人形は、地方の旦那さんの家でしか飾られませので、一般家庭では、赤飯をたいたり、ボタ餅をつくって神に供えてお祝いしました。昭和に入ってから一般の家庭でも飾りだしました。

㉔四月八日　お釈迦様の日

此の日は釈迦如来様のお生まれになった日です。各々のお寺では、信者や老若男女集って、和尚さんが釈迦の説かれた仏教の教えの説明会が有り、お経本をよんだり、甘茶をのんだり、子供達は歌ったりしてお祝いします。各家でも五目ごはんや赤飯などたいて、仏前に供えます。仏教をひらいた釈迦牟尼仏の生誕祭です。

――以下原稿なし

海に生きる女性たち



女川の女性たちはとても元気だ。家を守り、子どもを育てながら、食べていくために自ら船を操って海に出る。ここでは、竹浦で生まれ育ち、結婚してからも竹浦に住み続けたふたりの女性に、海との関わりを中心にお話を伺った。

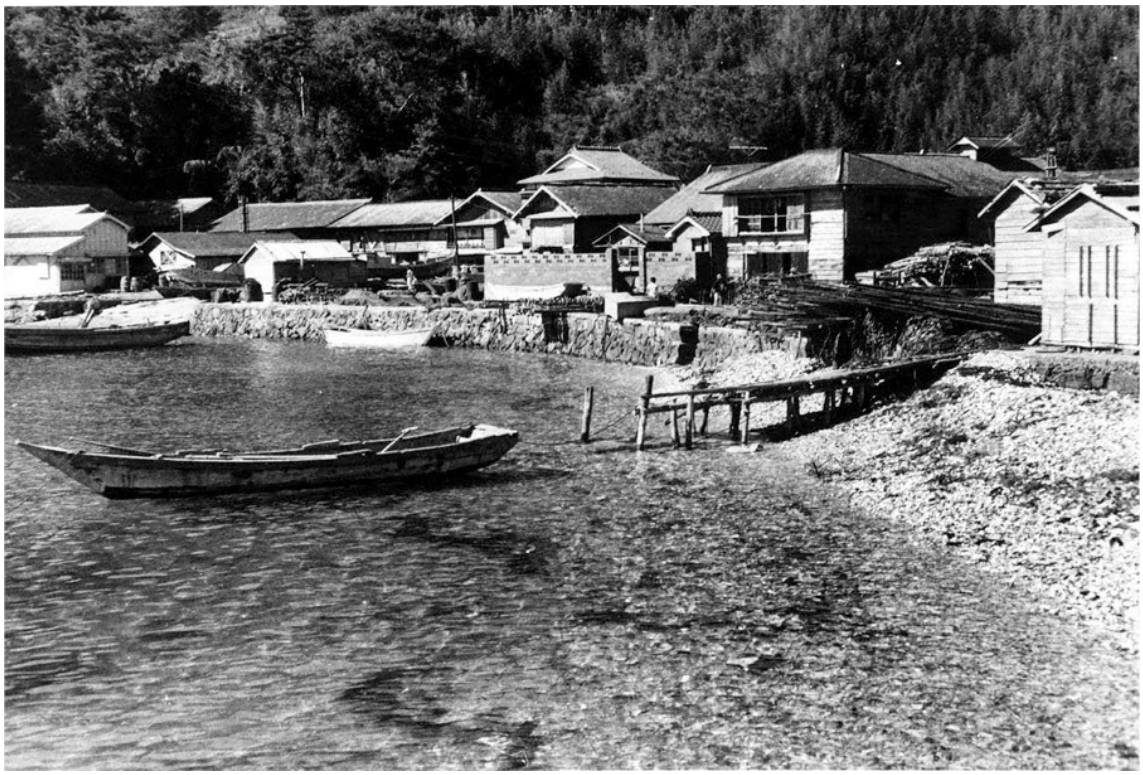
コリョウから養殖漁業へ

生まれは昭和十一年（一九三六）で、生まれてからずっと、震災来るまで竹浦だ。だんなは寄磯（石巻市寄磯浜）の人でね、お見合いで三十五年（一九六〇）に結婚して、そのあと実家の土地もらって竹浦に家建てて住んだんだ。

昔はコリョウ（小漁）ばりやった

竹浦では昭和のはじめはみんなコリョウシ（小漁師）やって、畑やって、自給自足みたいな生活だったんだ。だからどこの家も生活うんと苦しかったの。明日の食う米なくて、「米貸してけらいん」「味噌こ貸してけらいん」とかって笊こ携えてね、夜になってくるとオラ家へ来る人もあった。米は作んないから、みんなお金で買ってきたんだ。

昔はみんなコリョウシばりやったのね。小さいサッパ船で、沿岸でアワビとかガゼとかいろんなものを捕ったりして。あとは網をさしたり、カゴ入れてツブとかカニ捕ったり。岩さ天然につくフノリとか、ヒジキとかマツ



昭和30年代前半の竹浦［女川町教育委員会提供］

ボとかも採ったんだ。フノリは自分で食べたり、あとは人にやったり。ヒジキはカゴでなんぼも獲ってくっから、そいつはドラム缶で煮て、干して、乾燥させたのを知り合いに売ったんだ。あと定置網の小さいやつを立てて、そこさ魚を追いこんだりして。食べるのに多ければ女川の魚屋さんさ船で持ってって売ったり、多く漁獲あれば女川の魚市場さ水揚げしてセリで売ってもらって。山にはワラビだのフキだのってお生がってるけども、あんまり食べなかったね。魚が主だね。

私も船に乗ったんだよ。車の免許は持ってないけど、船の免許は持ってんだ。それで運転して、私が船頭でいばってた（笑）。ずっと昔は木造船。船外機なんてものはついて無くて、みんな櫓で漕いでたんだもの。私も漕げますよ。そのうち船外機が入るんだけど、その前にチャッカって言ってね、灯油のエンジンが普及したんだ。父親が戦争から帰ってきてカキの養殖が始まった年、釜石からそのチャッカつうのを持ってきた人がいて、うちの父親も使いはじめたんだな。船は平成十四年（二〇〇二）にだんな亡くなってからも、

竹浦の巡航船
昭和四十一年（一九六六）年頃撮影。右側に竹浦を出向した巡航船が見える。この当時まで運航されていた。［女川町教育委員会提供］

震災までひとりで乗ってたよ。

昔は浜はジャリ浜で、船なんかもみな、ジャリの上さあげて。浜に大っきいエノミ（榎）の木あったのね。そこまでずっと砂浜だった。シケなんかくっと、そのエノミの木に船を結んで。すごい大きな木だった。いつ伐ったんだか全然覚えてない。オラたちガゼ（ウニ）とりした時は、エノミのところでウニ剥きした。そのころは巡航船歩って（運航して）て、渡波（わたのは）から焼ウニする人たちが、バケツ携（たが）えて買いに来たったの。

そのころ、磯場は満潮の時は歩けなかったんだね、みんな浸（ひた）ってしまって。干潮になってくると、シノ島（づま）まで歩いて渡って行けっから、ウニとかツブ（ツブガイ）っことか、子どもたち採って、煮て食べたんだね。小さい時はツブはオヤツ替わりだったんだよね。

海は尾浦さ行く途中までと、桐ケ崎に行く途中までが竹浦のものだった。結構広かったから、よその部落の人が竹浦の人さ居（い）ねぇ時、金毘羅様って島までドロボウさ来たんだ。だから「今日、どこどこの部落でアワビとか何とかの開口（かいこう）なった」っていうと、番（見張り）つけに船でね、金毘羅様まで行ったもんだ。いまはそういうこともないけど、昔はちょこちょこ漁場争いはあったんだ。竹浦の人もね、昔ちょっと盗みに行ったりしたの（笑）。よその部落の浜までね、ナマコとか何とかってね、盗みさ行ったりね。結構いろんなこと、昔の人たちはやったの。

養殖やってだんだん裕福になってきた

そのうち漁船がだんだん大きくなって、この辺からも乗組員いっぱい出した。近海はカツオ船とかサンマ船とか、あとはマグロ船とか、サケマス、北洋船とか遠洋に行った人もずいぶんある。あと、遠洋漁業と同時に養殖漁業がだんだん発達してきたんだね。養殖が盛んになって、生活は楽になったぶん、仕事も忙しくなった。あと、養殖になって家族労働になったんだよね。家族全員で働くようになったな。

養殖は実家ではカキもワカメもやったし、ホヤもホタテもやった。ノリもやったよ。養殖のなかでも中心だったのはカキだね。加工まで竹浦でやって、あと漁協に売るんだ。うちは父親がカキを始めて、部落でも多いほう

だったんだ。養殖を始めたのは、竹浦で一番古いようだったよね。昭和二十年（一九四五）くらいの、兵隊から帰ってきてすぐ始めたんだ。そのころは、杉の木の丸太でつくったカキの筏でね。そして、渡波の万石浦から種ガキもらって種付けして。みな自分のトクイ（得意先）っつうのがあってね、その家から種ガキを買ってくんだ。十一月かな、マダコの開口なると、じいさん（父親）が糸に餌つけてカキ筏の上から投げると、カキの仕事しながらでもタコ釣れることがあったのね。

ノリの養殖も渡波からノリの種わけてもらって、竹浦でうちが一番早くやった。だんなさんが船やめてからだから、昭和四十年（一九六五）すぎあたりかな。ノリは乾燥機だの持たなきゃねえから、ノリやったのは竹浦で三軒くらいかな。ワカメの養殖やった時は、種を雄勝の船越だの名振だの、あっちのほうから買ってきたの。自分で食べるだけ干して、あとはほとんど生で、女川の加工屋さんさ売ったね。ほとんど加工はしなかったんだ。ワカメの漁場はナレ風（北西風）が吹くと白く波立って、ああいうのくると船もみんな波かぶってしまう。それでワカメつうのはあまり長くやってない。平成に入る前までかね。

ホヤを始めたのはいつだっぺ、わりと最近だね。これも最初タネが竹浦になくて、牡鹿半島の鮫ノ浦から買ってきたの。そこがうちの母親の実家で、親戚からホヤのタネを譲ってもらって、ホヤ始まったのね。ホヤはみんなほちこちでやったんだけども、自分たちの竹浦のホヤが一番おいしいって（笑）。肉厚で。ちょうど山吹の花咲く時がホヤ一番おいしいって、昔教えられたの。ホヤ養殖する前は、自分たちでメガネ（箱眼鏡）見て、岩さくっついてる天然のホヤを三本になったカギで獲ってきたんだ。そのころはホヤ獲っても自分で食うくらいで、どっさり獲って売るってことはなかった。売るようになったのは養殖始まってからだね。昔は夜中の二時とか三時とかにホヤを獲りにいくの。そうすると実家からおばあさん来て子どもたちにごはん食べさせて、学校さ出してやんだっちゃ。

主食は麦ごはんだよ。麦畑あって。あとは大豆、小豆、大根、ジャガイモだのは作ったから、海があって米さえ買えば、あとは生活

できたんだ。そのうち終戦後にカキやワカメの養殖やって、だんだん裕福になってきたわけよ。マグロ船や北洋船で漁があたると、船頭なら一年行ってくっと家建てることができるくらい結構な収入になるんだ。

いま思い出すだけでも、コリョウだ、カキだ、ノリだ、ワカメだ、定置網だ、ホヤだってどんどん変わっていったね。そしてうちではね、人に負けっと悔しがってさ。負けず嫌いだったから。アワビカギなんかも人より採んなきゃってがんばってね。漁業は創意工夫だからね。

海で子どもら食べさせた

オラはここで生まれて育って。昭和十二年（一九三七）生まれだ。だんなは雄勝の人でね。竹浦のカツオ船さ乗って、それで竹浦に来た時に見初（みそ）められたんだな。二十なんぼの時だな。そいでだんなが竹浦が好きなんだって言って、こっちで一緒に住んだんだ。だからずっと竹浦。この土地を離れるってことはとってもできねぇもんね。

いまでもウニ採ってるとこ夢に見んだよ

昔は竹浦の人たちが船主になって、ここさ大型船ずいぶん入ったんだ。だんなは大型船の機関長やってたんだ、カツオ船とか。だから「外地」って外国さ行って、一年も帰ってこねかった。一晩うちで寝ればいいとこね。だからいつも新鮮だもの。

だんなさんと別れたのは昭和四十八年（一九七三）。三十六歳で病気で亡くなったんだ。男の子三人いて、それから女手ひとつで、コリョウで子どもら食べさせたんだ。ほかの人からサッパ（船）借りて、船外機つけて、子どもがまだ小学校六年生くらいだったか、そいつに船のエンジンかけらして、ウニ捕りもアワビ捕りも、海藻類も全部やりましたよ。息子をあてにして、男衆（おとこし）たちより採りましたよ。

アワビだと十一月一日から翌年の一月いっぱいまで口が開ける。ナマコも正月に食べるから、この時期に口開けあるんだ。ナマコはサデ（小さな網）で掬（すく）った。ウニは六月～八月に口開（くちあ）くんだ。カギで獲ったり、カゴに餌つけて沈めておいて、次の朝獲りさ行くわけ

ね。部落の人たちが開口（口あけ）して一斉にやるからね。それを組合に売って。ウニもアワビも、ここがよく獲れるってとこがあるんだ。それは自分の父親から聞いてっからね。父親はそれがすっかりわかってんだよね。

海藻は天然もののワカメもあるし、岩ノリとかヒジキ、マツモ、フノリとか。ヒジキは嵩があったから良かったね。あとマツモかな。ノリはあんまり売れなかったし、フノリも乾燥して目方きかない（軽くなる）からね。海藻は口開いて一回目は班ごとに行って、それを女川から来た「買い人（にん）」に売ったんだ。それから後は個人で行って採ってきて売ったり食べたりしたんだ。船をイカリでつないでおいて、岩さあがって採るんだ。いまはそんなことしないけど、昔はほんとにすごかったんだよ。口開いて一番目の品物が値段いいからって、雪みぞれ降ってるとこに藁草履はいてね、水さ入って、籠に山になるくらい採ったんだ。

網とかは自分ではやんない。大網（大謀網（だいぼう））の手伝いさは行くけっど。当時、碇（いかり）つうのはなかったから、網やるっていうと、碇の代わりに俵（たわら）さ砂利詰めて、そいつを碇にして沖さ持っていく。「明日あそこのうちで「土俵丸（どひょうまる）き（束ね）」あっから、手伝いで行かなきゃねえな」って。そうすと、「あそこの家はたばこがいい」とかっていうのよ。たばこってオヤツのこと。たばこいいから、みんなで手伝いさ行ったものなの。たばこは、普段食べれない餅搗いたり、お赤飯とかね、ほんとにごっつぉう（馳走）。だからそれを狙っていくの。

昔は浜で葬式やったことも何回もあったんだ。船沈没して、乗組員の合同慰霊祭ってのを。浜に祭壇作って、うちの叔父だの、母親の兄弟だり。いつだったかカツオ船がシケに遭って。無線で、もうはや金華山まで帰って来てるって連絡があって、部落の人がみんな浜に出て見てんだけども、ついぞダメだったんだよね。沈んでしまって、二十人くらいみんな亡くなった。死体もあがんなくて。学校終わってすぐカシキ（食事係）に乗ってた子も死んでしまった。葬式は「小さい浜」でやったかな。それから後、船もガタガタなってダメになってきたんだ。養殖もだんだん始まってきたしね。

船は息子が高校卒業してからも一生懸命

やってたんだけど、三番目の息子が自分でできるようになってきたら、あとは乗らなくていいって言うんだ。ウニもアワビも、金毘羅さんのおかげで、本当に一人前の男衆より採ったんだ。私は畑はやってないから、海だけ。あとカキ剥きも、津波前までは現役でやってました。だから今でもカキ剥きなんかはやりてぇんだけど、身体がゆうこと聞かねぇもんね。気持ちはもう、いまにも！　だから夜寝ててもね、ウニ獲ってるとことか、アワビ獲ってるとことか、夢に見んだよ。だから毎日でも仮設（住宅）から下がって海の近くさ来たいの。

それでも生き延びてきたんだよ

小さい頃は掘っ立て小屋でね、ドアとかそういうのもなくて、莚を垂らしてね。そこで暮らしたのよ。うちは十人兄弟だったからね。竹浦で一番多かった。ほかの家も六人とか七人、八人とか子どもがいた。それでも生き延びてきたんだよ。

普段の食事は麦飯だべし。それにジャガイモごはん。あったかいうちはいいんだけど、冷めるとおいしくねえんだ。ひじきご飯はおいしかったよ。あと大根葉のごはん。お父つぁんが大型船で帰って来るって時は、母親に「芋ほって来いよ」って言われて、ジャガイモ掘ってくんのよ。そしてそれを海さ持って行って、船曳場で笊さ入れて足で踏んで皮剥くの。そうすると、うちの母親がつぶして砂糖を入れてキントンに作ったりしてね。それが一番のごちそうだったの。

風呂も一家にひとつないから、隣に借りに行くの。ひとつの風呂に十人入ったり二十人入ったり。昔は家の外に風呂があったからね、「隣の家がいま寝たから、いまのうちに行ってお風呂入ってくっべ」ってね。盗み風呂って言ったんだな、そんなことやってきたよ。オラ家ではドラム缶風呂だったよ。お湯を沸かすのにスギッ葉焚くから、入っててもスギの灰で頭白くなんだよ。

昔は焚き物も山に採りにいったんだ。昔は学校から帰ってくると、焚きつけのスギの葉を採ってくるのが子どもの仕事だった。あとお正月っていうと、山に行って薪を丸き（束）にして採ってくるわけよ。こうしてマルって

神輿の海上渡御
昭和三十三年（一九五八）の祭礼。神輿を船に乗せ、弁天島の琴平神社に詣でるとともに女川港を巡幸した。［女川町教育委員会提供］

（束ねて）重ねて置いておくと、気分がいいんだよね、やっぱり。

水は大きな井戸あったし、うちの前の沢の水も飲んだんだよ。水はきれいだったの。そして切れるつうことなく水が出てたから。後ろの山が高いから、水は沸いたんだ。井戸は共同で、みんなここさ汲みにきて飲み水とか風呂水に使ったんだ。

よく生き延びてきたもんだなと思うんだけっど、でもあんまり苦でもねぇしね、こんなもんだと思って。

竹浦港に碇はいらぬ三味や太鼓で船つなぐ

我々が育ってきたあたりは、まず竹浦はすごく盛り上がったの。大網もずいぶんやったし、カキもあったし、大型船も何艘も入ったから、他から男衆たちがいっぱい寄って働きに来んだ。そして、ここの人好きになって、ここに落ち着くとか、ずいぶんあったよ。オレたちのときは八十軒くらいは家あったんだよね。ひとつの家に七、八人くらいいるからね。だいたいの男の人は船（遠洋船）で出てるけど、お祭りとか正月の獅子振りにはわざわざ船も帰って来てね。

お祭りとか、お正月の悪魔っぱらいの獅子振りは尾浦からも出島からもみんな見さ来てね、部落いっぱいになったりしたんだもの。一月二日と三日の悪魔っぱらいは、昔は徹夜で夜通しやったんだからね。ほして一軒一軒家をまわるといろんなものをお膳さつけてくれるから、子どもらもそのおこぼれもらうために寝ねぇでついて歩くの。いま生きてれば九十歳くらいの人たちの獅子舞たら、すごいんだから！

遠島甚句さ文句を変えて、竹浦甚句ってのがあってね。いろいろあるよ、「竹浦港にイカリはいらぬ、三味やタイコで船つなぐ」「竹浦よいとこ四国に近い、なぜに金毘羅前にある」とかって。獅子舞の時は、昔は必ず最後のシメに遠島甚句歌ったんだ。

四月の一番大きなお祭りでは演芸会もやんの。必ず一ヶ月前から練習すんだよ。男と女が一緒になって、はやった歌謡曲とか民謡とか、何でもやったんだよ。そういうのでうんと盛り上がったの。ほいで雄勝でお祭りあるっていうと、竹浦の演芸会をうちのほうで

昭和初期の庭足神社の祭礼［女川町教育委員会提供］

も来てやってくれって、演芸会を「買いに」来んのよ。もらったお金は道具買うとか、手拭買うとか、実業団のお金にしたんだ。だからずいぶん雄勝だの女川だの、ぐるっと歩(あるっ)たんだよ。竹浦の演芸会は有名だったんだ。オラたちが青年団の時代かな。

だから竹浦は、この津波になってからも団結力も決断力もあったんだ。その当時からみんなが一団となっていて、そいつがずっと続いてきてるわけだ。そしてほがらかだったんだよね、男も女も。だからね、本当にこれくらいの部落だけど、思い出というのは本当にたくさんあるんだ。ここで生まれてここで育って、ここで死ぬって決めてっから、迷いがないのよ。それもただ暮らしてきたんでねぇ、人生、戦ってきたっていうの。で、津波がみんな持ってってけたから、後は何も迷いもないの。迷惑かけないで旅立つ仕度やんなきゃねえと思ってんの。

（二〇一五年十月・二〇一六年一月聞き取り）

伊勢大神楽
獅子舞とともに曲芸も演じる。いわゆる正月の獅子舞の原型となった。

大償神楽
岩手県花巻市に伝わる山伏神楽。獅子を「権現」と呼び、神として扱う。

雄勝法印神楽
雄勝の法印神楽にも獅子の演目がある。

春祈祷の獅子振り

〜春のご祈祷でお獅子の舞でもあげましょうか

画・平塚英一氏
（獅子振り披露会看板）

獅子舞は日本でも最も古い芸能の一つであり、正倉院には奈良時代の獅子頭が残されている。これは中国大陸からもたらされた「伎楽」に用いられたもので、その後獅子舞は社寺の祭礼や米の豊作を願う「田楽」系の芸能などに取り入れられていった。

一方、中世には修験道の山伏たちが、この獅子頭をもって、東北地方に神楽を広めた。これを山伏神楽、法印神楽などと呼ぶ。現在でも岩手県の山伏神楽などでは、獅子頭を使った舞が重要視されている。北浦に隣接する雄勝の法印神楽も、この系統に属している。

さらに、中世から近世にかけて伊勢神宮・熱田神宮周辺の下級神職らも獅子頭を持って全国を回るようになった。これを「太神楽」（大神楽とも）と呼び、後に江戸で寄席芸などとも合わさって、いわゆる正月の獅子舞としても定着していった。

女川の獅子振りが何に由来するものなのかは、判っていない。一説には、法印神楽に付随していた獅子が独立したものではないかともいう。また獅子頭の形状は、太神楽の影響を受けているともいえよう。さらに虎舞の影響についても否定できない。

しかしいずれにしても、これだけ多くの獅子舞が密集して存在することは、一つの文化的特色ということができよう。関東地方の三匹獅子舞や富山県のむかで獅子舞、鳥取県の

獅子頭の流失

東日本大震災では、多くの獅子頭が流失した。中には、漂着して元の場所に戻った獅子頭も多数ある。写真右は獅子振り披露会で展示された漂着獅子頭、左は石巻市の伊去波夜和氣命神社に納められた漂着獅子頭。

麒麟獅子舞、香川県の獅子舞などに匹敵する、群生する獅子舞文化圏だといえる。

＊　＊　＊

女川では獅子舞のことを「獅子振り」と称している。町内には多くの伝承団体が存在し、およそ次の通りである。大別すると区あるいは地区内の青年団、実業団、あるいは保存会等の組織で運営しているものに分かれる。相喜会とまむしは、愛好者の団体である。新規団体や休止したものも含めると、次の通り。

指ヶ浜区
尾浦青年団
竹浦実業団
桐ケ崎区
出島獅子舞
寺間伝承行事保存会
石浜熊野神社獅子振り保存会
宮ケ崎区
女川実業団
鷲神熊野神社氏子総代会
小乗浜実業団
高白浜実業興親会
横浦実業団
野々浜区
飯子浜実業団
塚浜区
江島獅子舞
相喜会
女川港大漁獅子舞まむし
旭が丘区
浦宿一区
大沢獅子舞
針浜獅子舞　（二三か所）

女川の伝承団体を特徴づけるのは、「実業団」という組織であろう。青年団とは別に存在するが重複する者は多く、獅子振りや祭礼の実行組織となっている。宮城県内には近世より「契約講」と呼ばれる互助組織が各地にみられるが、おそらくそれが変容したのであろう。

さて、女川以外に隣接する石巻市にも、次のように多くの獅子舞が存在する。『伝統・伝承芸能団体　石巻管内ガイドマップ・ブック』のデータを元に列挙する。

【牡鹿半島・石巻地区・東松島地区】

寄磯・前網・鮫浦・大谷川・谷川・泊浜・長渡（網地島）・田代島・十八成浜・小渕・給分・大原・

折立の獅子振り

流留の獅子振り

小網倉・鹿立・小竹浜・沢田折立・流留・渡波・鹿妻・井内・蛇田（二一か所）

【雄勝地区】

水浜・船戸・味噌作・上雄勝・下雄勝・伊勢畑・明神・大浜・立浜・桑浜・羽板・熊沢・大須・荒・船越・名振（一六か所）

【河北地区・桃生地区・河南地区】

皿貝・馬鞍・中島・中野・牧野巣・相野谷・北境・東福田・大森・辻堂・尾崎／谷津・堀家・川の上・吉野・釜谷・鳥屋森・入釜谷・尾崎・横川・追館・谷地・福地・芦早・間垣・原・後谷地・針岡・寺崎・須江・中山（三六か所）

【北上地区】

本地・女川・白浜・大須・長尾・追波・吉浜・立神・小室浜・大室浜・小泊浜・小指浜・大指浜・長塩谷・相川（一五か所）

さらに石巻以北にも獅子舞の分布は多く、南三陸町、気仙沼市、岩手県陸前高田市、大船渡市へとつながっていく。ただし北にいくほど虎舞や権現舞（本来は山伏神楽の一部）と混在するようになるといった傾向が見られる。

＊　＊　＊

女川の獅子振りは、集落によって特色があるが、春祈祷時の上演形態は凡そ次のような形をとる。

①たんぶち唄

獅子が家に入る際に、「たんぶち唄」が歌われる。これは「田打唄」が原型となっていると考えられるが、中には「潅仏」などの字を充てる例も見られる。なお一行に先立って、会計の者が訪れ、ご祝儀などを頂いている。

②獅子の入場と頭噛み

たんぶち唄が終わると、囃子が始まる。獅子の囃子は、笛、小太鼓（締め太鼓）、大太鼓（鋲打ち太鼓）を基本とし、鉦が加わる場合もある。また、指ヶ浜では笛がない。囃子の一行は家には上がらず、庭で奏する。最初の囃子をヤグラ、ヨイサカ、ドバヤシ（ドンバヤシ）などと呼ぶところもあるが、特に名称がない場合もある。

縁側からオガミと呼ばれる神棚のある部屋に入ると、まず神棚に向かい、次いでその家の主人をはじめ家族の頭を噛む。かつては囲炉裏の自在鉤に悪魔が宿るとされ、自在鉤を噛んだ。また噛んだ魔を外に吐き出す所作を

波伝谷の獅子舞（南三陸町）
耳が女川の一部と共通する「鹿耳」で、目が飛び出しているのが特徴。

春祈祷の獅子
春祈祷の獅子は、途中でおとなしくなった際に、お神酒を口の中に垂らす。

するところもある。

③眠る獅子

そのあと、各部屋を回ってオガミに戻ると、獅子は体を低くして眠る所作に入る。囃子もゆっくりとしたリズムに変わる。このとき家人は御神酒を持って近づき、獅子の口に御神酒を垂らす。

④早い囃子と虎舞

この時点で獅子につく者が、外の囃子に合図を送り、早い囃子へと変わる。これをシコロ、ハラハラ、スコール、スクリュー、アラシなどと呼ぶ。おそらくシコロがスコールに転訛し、その連想でアラシなどが出てきたのであろう。この演奏は早いリズムで、獅子は一層激しく舞う。この部分を「トラマイ（虎舞）」と称する。天井の高い旧家では、幕の中で肩車をして梁を噛むといった所作が入った。

⑤おさめ

最後に獅子は縁側に出て、幕内の演者も外に出て終了となる。「おさめ」の口上が入る。家にもよるが、多くの場合、このあと酒食のもてなしを受ける。

＊　＊　＊

震災前、既に活動を停止していた江島を除けば、女川町内には地域の二十団体と有志の二団体が存在していた。この中、震災によって十四団体が道具を流失した（ほか二団体は津波を被ったが流失は免れた）。北浦でも尾浦・竹浦・桐ヶ崎は道具を失っている。

やがて「女川町獅子振り復興協議会」が設立され、日本財団をはじめ文化財保護・芸術研究助成財団、アメリカン・エキスプレス・インターナショナル、宮城県地域文化遺産復興プロジェクト、エルメスジャポン、ワールド・モニュメント財団等の支援を受け、道具類の再建・復活が叶った。こうした支援に感謝し復興を記念する意味で、「復活！獅子振り披露会」が平成二十五年（二〇一三）八月に開催されるに至った。

獅子振り復興協議会の事務局を務める平塚英一氏（当時女川町役場勤務）は、「地域の民俗芸能を後世に残すための継承活動が、地域のコミュニティーの結束や地域内の相互連携を推進する。それが、地域の民俗芸能『獅子振り』なのだと思います」と述べている。

指ヶ浜

指ヶ浜の獅子は、黒の頭に緑の幕。平たい形状をしていることが特徴。

復活！女川町獅子振り披露会　平成 25 年（2013）8 月 11 日

高台移転先での春祈祷　平成 30 年（2018）1 月 2 日

尾浦

尾浦の獅子は、赤の頭に濃紺の幕。頭を地面すれすれに下げて舞う所作が特徴的。

浜の番屋での春祈祷（緑唐草の幕）　平成 27 年（2015）1 月 2 日

春祈祷の最初に保福寺で舞う　平成 31 年（2019）1 月 2 日

竹浦

竹浦の獅子は、黒の頭に緑の幕。写真下が流矢前の獅子頭を復元した頭。

平成 23 年（2011）11 月の復興祭にあわせて山形で作られた仮の獅子頭

先行して完成した南地区高台での春祈祷　平成 29 年（2017）1 月 3 日

桐ヶ崎

桐ヶ崎の獅子は、白毛で赤の頭に緑の幕。草を食べるような低い姿勢で舞うのが特徴。

復活！女川町獅子振り披露会　平成 25 年（2013）8 月 11 日

高台に完成した集会所での春祈祷　平成 29 年（2017）1 月 3 日

女川各地

石浜　黒の頭に茶の幕・鹿耳

寺間　赤の頭に緑の幕

女川　黒の頭に緑の幕

宮ヶ崎　黒の頭に茶の幕・鹿耳

小乗　黒の頭に紺の幕

鷲神　黒の頭に緑の幕・鹿耳

横浦　黒の頭に濃紺の幕

高白浜　黒の頭に茶の幕

飯子浜　黒の頭に緑唐草の幕

野々浜　黒の頭に緑の幕

大澤安住　赤の頭に緑の幕

塚浜　黒の頭に茶の幕

竹浦の人々が秋田県に集団避難中に拵えた座布団獅子

我歴 stock in 女川　平成 24 年（2012）7 月 15 日

復活！女川町獅子振り披露会　平成 25 年（2013）8 月 11 日

復活！女川町獅子振り披露会　平成 26 年（2014）7 月 21 日

日本博「東京シシマイコレクション」　令和元年（2019）5 月 11 ～ 12 日
東京国立博物館にて竹浦・女川地区の獅子振りが上演。他に槻沢虎舞（岩手県陸前高田市）、福田十二神楽（福島県新地町）が出演。

おながわ港祭り

戦後始まった「女川みなと祭り」。その中で、「海上獅子舞」が行われてきた。地区ごとに獅子振りが漁船に乗って舞いつつ、女川湾を巡幸。そして最後は岸壁に上陸して演舞となる。［阿部貞撮影］

主要参考文献

港湾協会第六回通常総会宮城準備委員会編『宮城県案内』一九三三年
日満財政経済研究会『東北及北海道に於ける重要港湾に関する調査』一九三六年
宮城県史編纂委員会編『宮城県史26』一九五八年
女川町編『女川町勢要覧』一九三七年／一九五七年
女川町誌編纂委員会編『女川町誌』一九六〇年
和歌森太郎編『陸前北部の民俗』一九六九年
東北民俗の会編『陸前の年中行事』一九七一年
三宅太玄編『万ふしきの事扣覚帳：寛政十二歳よりの事』一九八三年
三宅太玄編『牡鹿郡万御改書上』一九八六年
日本歴史地名大系4『宮城県の地名』一九八七年
石巻市史編さん委員会編『石巻の歴史 第3巻 民俗・生活編3』一九八八年
女川町誌編さん委員会編『女川町誌　続編』一九九一年
女川町立女川第六小学校塚浜分校編『塚浜・小屋取の年中行事』一九九二年
女川町教育委員会・女川町文化財保護委員会編『女川の文化財』一九九九年
女川町教育委員会編『女川町の狛犬』二〇〇三年
東北歴史博物館編『東北地方の信仰伝承：宮城県の年中行事』二〇〇五年
女川町編『潮風の響音：女川町町制施行80周年記念要覧』二〇〇六年
石巻地区文化協会連絡協議会他制作『伝統・伝承芸能団体石巻管内ガイドマップ・ブック』二〇一四年
小山亀蔵『和船の海』一九七三年
井出策夫「女川町」『地理』二〇（一二）一九七五年
小野寺正人『宮城のまつり風土記：陸前浜の祭りから』一九七八年
小岩勉『女川海物語』一九九二年
千葉雄市「宮城県の民俗芸能（1）法印神楽」『東北歴史博物館研究紀要』（一）二〇〇〇年
千葉雄市「宮城県の民俗芸能（2）」『東北歴史博物館研究紀要』（二）二〇〇一年
羽島愛奈・薬袋奈美「漁村集落における生活行為と集落空間の利用―宮城県女川町竹浦集落を事例として―」『日本女子大学紀要　家政学部六一』二〇一四年

※そのほか総務省統計局による「国勢調査結果」を参照した。

執筆者（五十音順）

伊藤　純（信仰・さまざまな神仏）
今井雅之（指ヶ浜・御前浜）
今石みぎわ（海に生きる女性たち）
久保田裕道（女川北浦地域の暮らしと祈り・尾浦・竹浦・桐ケ崎・獅子振り）
小谷竜介（春を呼ぶ年中行事）

調査協力

鈴木文明　鈴木洋一　渡邊秀久（指ヶ浜）
東海智　東海さよこ　東海政広（御前浜）
阿部亀一郎　阿部京子　阿部とし子
小松長一　小松みよ子　小松吉城
鈴木由男（尾浦）
阿部貞　阿部良子　杉山恵美子
鈴木紀利枝　鈴木成夫（竹浦）
鈴木清次　鈴木正文（桐ヶ崎）
平塚英一
石巻市視聴覚センター
女川町教育委員会
東北歴史博物館

※そのほか女川町の多くの方々にご協力をいただきました。附して感謝申し上げます。

あとがき

『ごいし民俗誌』『かりやど民俗誌』に続き『おながわ北浦民俗誌』を刊行することができました。女川を初めて訪れたのは、震災の年の八月でした。役場の平塚英一さんにお会いし、判っている限りの獅子振りの状況を教えて頂きました。「今はそれどころではないけれど、獅子振りを絶やすわけにはいかないから」と仰っておられました。

その後さまざまな支援が実現して、獅子振りは復興を遂げました。その過程でお会いした竹浦の鈴木成夫さん阿部貞（ただし）さんには、大変お世話になりました。この民俗誌をつくるにあたっては、多大なご協力をいただいています。多くの写真を撮っておられる阿部さんには、貴重な写真を提供いただきました。

しかしそれでも、本書にはごく一部のことしか載せることができませんでした。震災前の暮らしを語り継いでいくことは、過去から未来へ文化を繋いでいくことでもあります。本書に書けなかった多くのことを、ぜひこれからの世代に伝えていただけるよう、その小さな契機になれば、大変幸いです。（久保田）